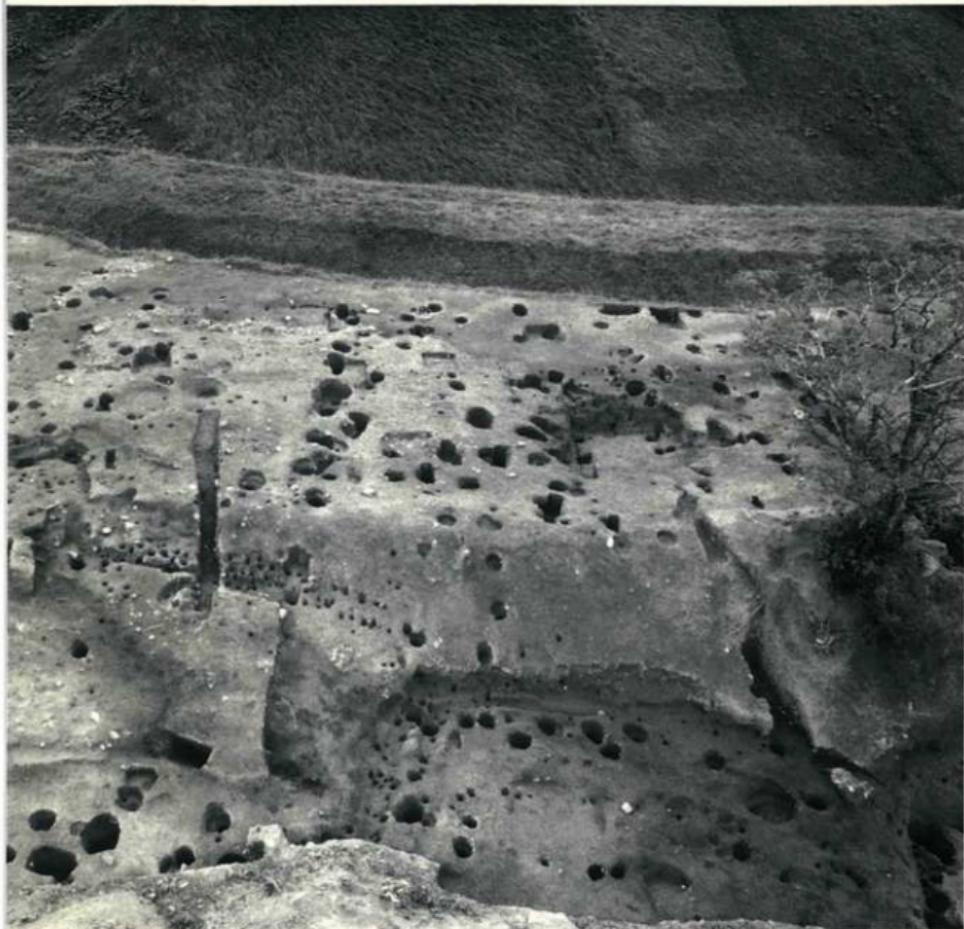


史 跡

# 上之国勝山館跡 XX

— 平成10年度発掘調査環境整備事業概報 —



1999・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

# 上之国勝山館跡 XX

— 平成10年度発掘調査環境整備事業概報 —

1999・3

上ノ国町教育委員会



# 序

啓蟄も過ぎ、松前の海近く南向きの崖土から、早春の代表的な山菜アザミが貌を覗かせています。山菜が食卓に彩りを添える松前の春の始まりです。

昨年の5月に始めた勝山館跡の遺構確認調査の範囲は、大手空塹の外第一平坦面南西部分約800m<sup>2</sup>、約6ヶ月の土と汗にまみれる作業でしたが、館跡からの遠望は爽快で、海風がほてる頬を心地よく撫でてくれました。

この間、文化庁記念物課を始め関係各機関の諸先生、調査研究専門員としてご指導をお願いしている朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生には遠路お越しいただき、懇切丁寧なご指導ご助言を賜りました。また、建築学の立場からご指導を頂戴しております文化学院の鈴木亘先生にも貴重なご助言を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

さて、今年度の発掘調査の成果の中で物議を醸したのが、舶載白磁皿の高台裏に刻印された記号です。アイヌの「シロシ」(所有印)ではないか、さらに一步進めて同一父系集団の記号「シネ・イトックバ」ではないかという議論が、青森県北津軽郡市浦村との友好町村締結10周年を記念して行われたミニシンポジウムの会場で熱っぽく展開され、終了後には、町内の郷土史研究家から、山人の木印(木の持分を表示する占有記号)に酷似しているとの指摘も頂戴しました。

自他を区別する所有印を刻印する対象物の違い—漆器椀・白磁皿・榎木や、出土遺物に印された声なき記号の背後に何が視えてくるか、歴史学や民俗学、文化人類学など周辺諸学の力を借り、更なる検証を進めるとともに、そのプロセスを広く公開し、多くの人々の共感と理解を得ながら、いきいきとした地域史像を地域の人々と共有したいと願っています。

関係各機関、諸先生方には、より一層のご助言ご叱正を賜りますよう切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成11年3月

北海道檜山郡上ノ国教育委員会

教育長 上野秀勝

## 本文目次

### 序

本文目次／挿図目次／表目次

例言／引用参考文献

I 調査の概要.....	1
II 遺構確認調査.....	11
1. 調査目的.....	11
2. 検出遺構と出土遺物.....	11
(1) 位置・概要.....	11
(2) 層序.....	11
(3) 掘立柱建物跡.....	11
(4) 竪穴建物跡.....	22
(5) 土壙.....	31
(6) 通路跡.....	43
(7) 地割.....	43
(8) 出土遺物の概要.....	51
III 小括.....	58
IV 保存処理.....	61
V まとめ.....	62

### 挿図目次

第1図 遺跡地形図・調査区位置図.....	2
第2図 調査区範囲図.....	3
第3図 調査区土層堆積図.....	5
第4図 調査区遺構配置図.....	9
第5図 建物跡想定異同図.....	13
第6図 第1号建物跡想定図.....	15
第7図 第2号建物跡想定図.....	16
第8図 第3号建物跡想定図.....	17
第9図 第4号建物跡想定図.....	19
第10図 第5号建物跡想定図.....	20
第11図 第6号建物跡想定図.....	21
第12図 第94号竪穴建物跡平面図他.....	24
第13図 第95号竪穴建物跡平面図他.....	25
第14図 第96号竪穴建物跡平面図他.....	26
第15図 第96号竪穴建物跡炭・焼土範囲平面図他	27
第16図 第97号竪穴建物跡平面図他.....	28
第17図 第98号竪穴建物跡・土壤41平面図他	29
第18図 土壙23平面図他.....	30
第19図 土壙48と集辺地区戻の出土状況.....	32
第20図 土壙48平面図化.....	33
第21図 土壙48出土銅錢拓影.....	34

第22図 遺物分布図1 (印のある白磁皿) .....	35
第23図 遺物分布図2 (白磁皿) .....	36
第24図 遺物分布図3 (陶磁器) .....	37
第25図 遺物分布図4 (鍛冶・金属製品) .....	38
第26図 遺物分布図5 (鉄製品種別) .....	39
第27図 調査区出土遺物・参考図.....	40
第28図 藩羽口出土状況図他.....	41
第29図 盛土地盤図.....	42
第30図 調査区出土遺物 (陶磁器) .....	46
第31図 調査区出土遺物 (越前・珠洲描鉢) .....	47
第32図 調査区出土遺物(鉄製品・鍛冶関連遺物) .....	48
第33図 調査区出土遺物 (銅製品・骨角器) .....	49
第34図 調査区出土遺物 (石製品・土製品) .....	50

## 表目次

表1	南北セクション東壁土層	7
表2	東西セクション南北土層	7
表3	南北セクション東壁土層	8
表4	第94号竪穴建物跡土層観察表	24
表5	第95号竪穴建物跡土層観察表	25
表6	第96号竪穴建物跡土層観察表	27
表7	第96号竪穴建物跡土層観察表	27
表8	第97号竪穴建物跡土層観察表	28
表9	土壤23土層観察表	30
表10	土壤41土層観察表	30
表11	土壤48土層観察表	33
表12	土壤48出土銭一覧表	34
表13	土壤48出土銭集計表	34
表14	盛土土層観察表	42
表15	出土遺物観察表（陶磁器）	54
表16	出土遺物観察表（鉄製品）	55
表17	出土遺物観察表（銅製品他）	56
表18	出土遺物集計表（陶磁器）	57
表19	出土遺物集計表（鉄製品他）	57

## 写真図版目次

P L. 1	調査区全景
P L. 2	遺構検出状況
P L. 3	出土遺物
P L. 4	出土遺物
P L. 5	調査区全景
P L. 6	遺構検出状況
P L. 7	遺構検出状況
P L. 8	遺構検出状況
P L. 9	遺構検出状況
P L. 10	遺構検出状況
P L. 11	遺構検出状況
P L. 12	遺物出土状況
P L. 13	遺構検出状況
P L. 14	遺構検出状況
P L. 15	遺構検出状況
P L. 16	遺構検出状況
P L. 17	出土遺物
P L. 18	出土遺物
P L. 19	出土遺物
P L. 20	出土遺物

附図 調査区遺構配置図

## 例 言

1. 本書は史跡上之国勝山館跡の平成10年度発掘調査及び環境整備事業についての概要をまとめたものである。
2. 本年度の発掘調査は次の体制で臨んだ。

調査主体者 上ノ国町教育委員会  
教育長 上野秀勝  
指導 上ノ国町文化財保護審議会特別委員  
福山工業大学教授 足達富士夫  
文化学院講師 鈴木亘  
同勝山館跡調査研究専門員  
元国立歴史民俗博物館館長 石井進  
京都橘女子大学教授 朝尾直弘  
神奈川大学日本民俗文化研究所 綱野善彦  
東北学院大学教授 櫻森進  
東北芸術工科大学特任教授 仲野浩  
主旨 上ノ国町教育委員会文化財課 課長  
松崎水穂 課長補佐兼博物館・整備係長  
渡部孝之 文化財係長 齊藤邦典 博物館・整備係  
松田輝哉 笠谷将人 瞽詒調査員  
三浦英俊 臨時事務補 細川より子  
勝山館跡修景技術専門員 北島謙（4月1日～9月30日）山崎淳一（10月1日～）（上ノ国町建設課長）
3. 発掘担当者 学芸員 松崎水穂  
調査員 学芸員 松田輝哉  
調査補助員 山崎洋子 笠谷泰智子 竹内江美子 一戸賢太郎 阿部知子 田中恵子（東北芸術工科大学）橋口亘（奈良大学）若松重弘（山口大学）  
作業員 青木千秋 浅原すみ 井越祥子 小田川嘉美子 大谷弓子 川合やす子 川村恵司 川口泰子 笹浪竹志 杉山稻子 鈴木千春 住吉春子 田畠康子 沼沢国枝 八田綾子 八田暢子 藤田裕美 松本津枝子 目黒加奈子 森喜美子 今村昌樹 川嶋瑞江 高島博志 内藤敷 西川直明 細川キヨ子 松岡孝広 柳原由里子 山田良子  
保存処理作業員 木村洋子 沢谷和枝
4. 本書の編集は松崎、松田が協議の上、松田が行った。
5. 本書の作成はI～IVを松田、Vを松崎の分担で行った。尚遺物観察表・集計表は山崎、土

- 層観察表は竹内、掘立柱建物跡想定図は笠谷の各補助員が作成したものに基づいている。
6. 緯図の作成は担当者、調査員の指示により調査補助員、作業員が行った。
  7. 土層の土色は「新版標準土色帖」（農林水産技術会事務局）を遺物の色調名は「標準色彩図表A」（日本色研事業株式会社）を用い、目測で比定した。
  8. 本書の調査時の写真は松崎、松田、川村恵司が撮影した。
  9. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多く御指導と御援助を賜った。

文化庁記念物課 田中哲雄 本中眞 伊藤正義 磯田幸男 坂井秀弥、同建造物課 益田兼房 大和智、北海道教育庁文化課 木村尚俊 大沼忠泰 稲市幸生 千葉英一 貢井隆三 安岡政光 清水孝幸、国立歴史民俗博物館 千田嘉博、奈良国立文化財研究所 沢田正昭 高妻洋成、文化財建造物保存技術協会 松本優 田中洋子、札幌学院大学 船津功、弘前大学 齊藤利男、岩手県立大学 菅田慶信、筑波大学 松本建連、富山大学 宇野隆夫、信州大学 笹本正治、工学院大学 渡辺定夫、神奈川大学 田島佳也 津田良樹、昭和女子大学 児島恭子、跡見学園女子大学 荒木伸介 泉雅博、九州大学 西谷正、創路湖陵高等学校 中村和之、北海道開拓記念館 小林幸雄、市立函館博物館 長谷部一弘、青森県郷土館 三宅徹也、八戸市博物館 佐々木浩一、平賀町郷土資料館 小笠原豊 渡部学、秋田県公文書館 煙山英俊、八王子市郷土資料館 土井義夫、愛知県陶磁資料館 植崎彰一、北海道埋蔵文化財センター 越田賢一郎 高橋和樹 石井淳平、山形県埋蔵文化財センター 山口博之 高桑登、瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐 金子健一、三重県埋蔵文化財センター 田阪仁、堺市立埋蔵文化財センター 森村健一、乙部町教育委員会 森広樹 藤田巧、今金町教育委員会 寺崎康史、函館市教育委員会 佐藤智雄、七飯町教育委員会 石本省三、南茅部町教育委員会 福田祐二、石狩市教育委員会 石橋孝夫、

江別市教育委員会 佐藤一志、伊達市教育委員会 大島直行 青野友哉 小島朋夏、虻田町教育委員会 角田隆志 角田弥生、静内町教育委員会 蔡中剛司 齐藤大朋、青森県教育委員会 鈴木和子、浪岡町史編纂室 工藤清泰、市浦村教育委員会 横原滋高、南部町教育委員会 永井治、中里町教育委員会 齊

藤淳 愛知県史編纂室 城ヶ谷和広、知覧町教育委員会 上田耕、今帰仁村教育委員会 山内昌治 玉城繁 宮城弘樹、勝連町教育委員会 宮城伸一、漆器文化財科学研究所 四柳嘉章、中里忠寛、中里紀元、三輪康浩、澤井玄 落合治彦 栗林知広(順不同 敬称略)

## 引用参考文献

- 『総合日本民俗語彙』 1955・56年 民俗学研究  
所編
- 『松前町の文化財』 1976年 松前町教育委員会
- 『釣針』 1976年 直良信夫
- 『新版仏教考古学講座第5巻』 1984年 石田茂作監修
- 『出土渡来銭—中世—』 1986年 坂詰秀一編
- 『供養具と僧具』 日本の美術283 1989年 鈴木規夫
- 『民具実測の方法』～Ⅲ』 1989年 神奈川大学  
日本常民文化研究所
- 『日本海域の土器・陶磁器 中世編』 1989年  
吉岡康暢
- 『亮昌寺資料目録』 1993年 諸アイヌ民族博物  
館
- 『中世須恵器の研究』 1993年 吉岡康暢
- 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995年 中世土  
器研究会編
- 『瀬戸市史 陶磁史篇四』 1994年 瀬戸市
- 『中世の出土銭』 1994年 永井久美男編
- 『中世の出土銭 補遺』 1996年 永井久美男  
編
- 『日本出土銭総覧 1996年版』 1996年 兵庫埋  
蔵銭調査会
- 『日本民具辞典』 1997年 日本民具学会
- 『東北地方の在地土器・陶磁器』 1998年 東  
北中世考古学会・福島県考古学会
- 『中・近世の北陸』 1998年 北陸中世土器研究  
会
- 『越前朝倉氏・一乗谷 眠りからさめた戦国の城  
下町』 1998年
- 『札前』 1985年 松前町教育委員会
- 『史跡志苦館跡』 1984～86年 函館市教育委員  
会
- 『浪岡城跡Ⅲ～Ⅶ』 1979～84年 浪岡町教育委  
員会
- 『普正寺遺跡』 1984年 石川県埋蔵文化財セン  
ター
- 『特別史跡朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ～V』  
1979～96年 福井県教育委員会 福井県立一乘  
谷朝倉氏遺跡資料館
- 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ～V』 1992  
～95年 草戸千軒町遺跡調査研究所
- 『今帰仁城跡』 1983年 今帰仁村教育委員会
- 『漳州窯』 1997年 福建省博物館
- 『史跡上ノ国勝山館跡Ⅰ～IX』 1980～98年  
上ノ国町教育委員会
- 『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶  
磁研究2』 1982年 上田秀夫
- 『15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿  
易陶磁研究2』 1982年 小野政敏
- 『福建省漳州窯系陶磁器（スワトウ・ウエア）に  
ついて』『大阪城跡の発掘調査4』（財）大阪文  
化財センター 1994年 森村健一
- 『北方からの視座』『岩波講座日本通史別巻2』  
1994年 松崎水穂



# I 調査の概要

## 1 調査

史跡上之国勝山館跡は、松前氏の祖武田信広により15世紀後半頃に築城され、その後慶長（1596～1614）の初め頃まで存在したという伝承を持つ山城である。昭和52年、「道南十二館」の一つとして知られる「花沢館跡（上ノ国町字勝山）」と共に国の史跡に指定された。昭和54年度より環境整備事業に伴う発掘調査を実施し、本年でその調査も20年目を迎え、尚継続中である。

史跡指定地は、600基以上が想定される中世墓「夷王山墳墓群」を含め約35万m<sup>2</sup>に及ぶ。館中心部は、夷王山から北東方向、寺ノ沢、華ノ沢に挟まれた丘陵にある。中心部は掘切り・切岸・盛土により作られた大きな三つの平坦面から成る。曲輪名の伝承が無いので、北から塹外にある「第一平坦面」、塹内にある「第二・三平坦面」と仮称している。その内、第二・三平坦面は中央に縱貫する通路があり、平坦面端部に柵列を巡らしていたことが、発掘調査で明らかになっている。

第一平坦面は面積約5,000m<sup>2</sup>、第一平坦面と第二平坦面の間に、二重の塹が掘りきられている。この北東部には虎口が想定されている。又大きな段により、北半部地区と南半部地区の二つに分けられそうである。北半部地区は中央部が高く、左右は沢に向かって離壇状に低くなる。この離壇状の地形は、段や溝で画された地割の痕跡と思われる。南半部地区は空堀に接し、平面形が台形状である平坦な一つの面として捉えられ、北半部の様な地割痕跡と想定される離壇地形は、特に認められない。昭和63・平成元・2年度の調査で、二重の塹跡、塹を渡る橋のものと思われる柱穴、南半部の平坦面で掘立柱建物跡10棟、竪穴建物跡3棟等を検出している。又、今年度調査地区的南東部で中央通路跡と考えられるものを検出した。

この第一平坦面の南半部地区西半と北半部地区西半の一部が、本年度の調査地区にあたる。

今回、南半部地区では地割一つ掘立柱建物跡六棟（過年度検出のものと一部異動があり、後述する）と竪穴建物跡一棟、北半部地区では、地割三つ、竪穴建物跡三棟等を検出した。

第二平坦面は面積約7,000m<sup>2</sup>、3つの平坦面の中で最大規模である。北西部には勝山館の中心建

物とみられる「客殿」跡がある。さらに石敷磧石建物跡、銅製品鉄造遺構、大型井戸、矢倉門様の4本柱建物跡など多種多様の遺構があり、中央通路の両側には地割が多数展開し、内部に掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土壤などを多数検出している。

第三平坦面は、面積約3,500m<sup>2</sup>、南西部に向かって丘陵の幅が狭くなる所であり、館の揚手口でもある。最高所には「館神八幡宮」が祀られていた。過年度の調査で、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、揚手門跡などを検出している。

## 2 調査法

調査方法の概要是以下の通りである。発掘区の設定は、20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式を探用した。また、建物の概要を知るために柱穴配置略図を（縮尺1/40）平板測量で作成し、柱穴間の重複・覆土の状態を観察しながら掘り下げた。焼土・土壤などの遺構は半裁し、セクション図を作成後掘り下げ、土壤のサンプリングを行った。遺物の取り上げ方法は、I・II層は4m×4mのグリッドを2m×2mに4分割して一括して取り上げ、遺構面のIII層は実測図に記録した後にレベルを付して取り上げた。尚、遺構図は柱穴・溝・竪穴建物跡は1/20、焼土・土壤は1/10、遺物分布図は1/20で、遺物出土状況微細図は1/5もしくは1/2で、通り方測量で作成した。

## 3 調査経過

5月11日 作業員に作業内容、就業規則その他説明。その後、作業開始。

5月12日 人力による表土層の除去作業。

6月上旬 表土層の除去ほぼ完了。空堀Bに接する、調査区南西部の調査。

6月14K15・20区周辺で、高台裏に印が記された白磁端反皿出土。14J16区で縄羽口出土。14L5・14K1区付近で炭化材出土、第94・95号竪穴建物跡調査。

7月 第96号竪穴建物跡調査、土壤41調査。

8月 第98号竪穴建物跡、中央通路の調査。銅製花瓶出土。第97号竪穴建物跡より坩埚片が大量に出土。焼土17より瀬戸美濃灰釉端反皿3個体出土。

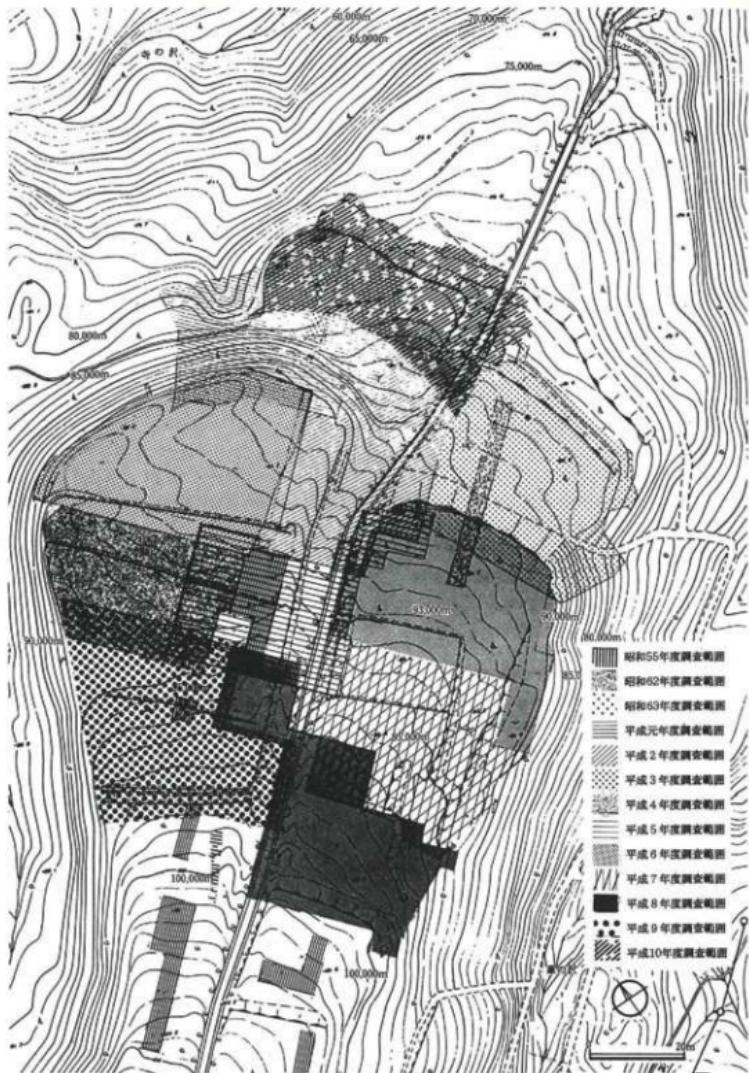
9月 中央通路調査。14J6・7・14・19区調査、土壤46調査。

上ノ国町字上ノ国

日本海



第1図 遺跡地形図・調査区位置図



第2図 調査区範囲図

9月17日 土壌48より銅鏡出土。

完掘写真撮影。

10月16日 勝山館跡調査研究専門員による現地調査・指導。

10月21・22日 上ノ国町文化財保護審議会特別委員鈴木亘先生による現地指導。

10月23日 埋め戻し作業開始。

11月12日 埋め戻し作業終了。

#### 4 基本層序

I 層 表土層。10 YR 3/3暗褐～10 YR 4/4褐シルト。

II 層 館廃絶後の自然堆積層。10 YR 3/3暗褐～10 YR 4/4褐シルト、やや密、炭化物混入。

Os-a、Ko-d を含む（従来 Os-a としていた白色火山灰は、Ko-d の可能性もあり確認調査中である）。

III 層 館機能時の整地盛土層。10 YR 4/4褐～

10 YR 5/8黄褐、密、ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。土質などにより細分される。

IV 層 繩文期以後館が形成されるまでの堆積層。

IV a 層 黒褐色土層10 YR 2/2黒褐～7.5 YR 3/3暗褐、シルト。

IV b 層 明黄褐色火山灰10 YR 6/6明黄褐色火山灰。やや密。

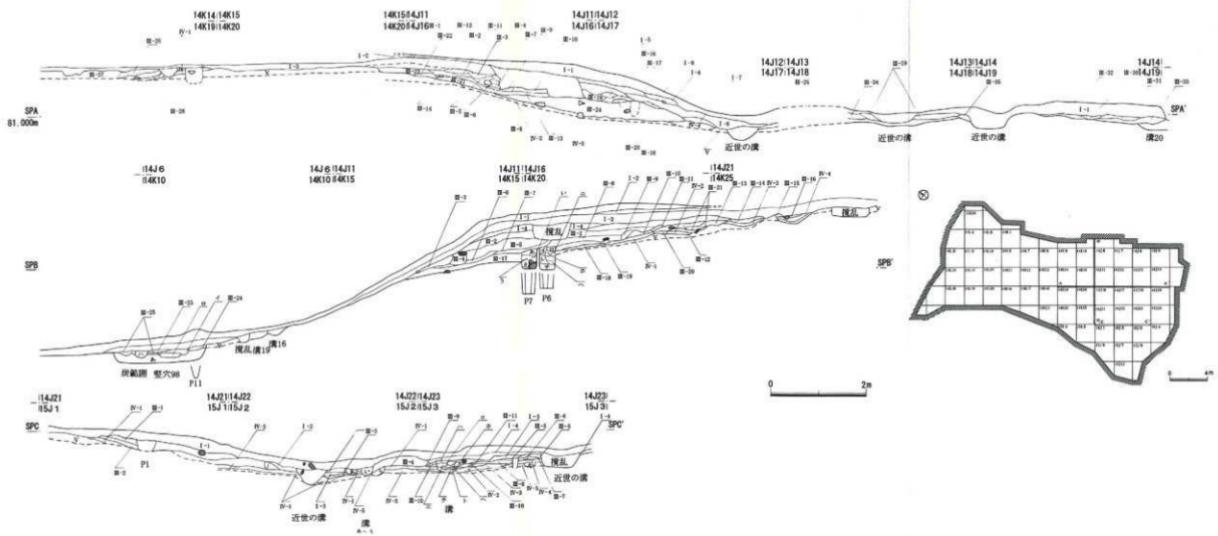
IV c 層 繩文期包含層10 YR 4/6褐シルト、やや密。

V 層 ソフトローム。10 YR 5/6にぶい黄褐～10 YR 5/6黄褐。

VI 層 ハードローム。7.5 YR 5/4にぶい褐～10 YR 4/6褐。

#### 3 保存処理

本年度は鉄製品480点、銅製品102点の処理を行った。併せて、処理済鉄製品の内、鏽が再び生じたものを400点再処理した。

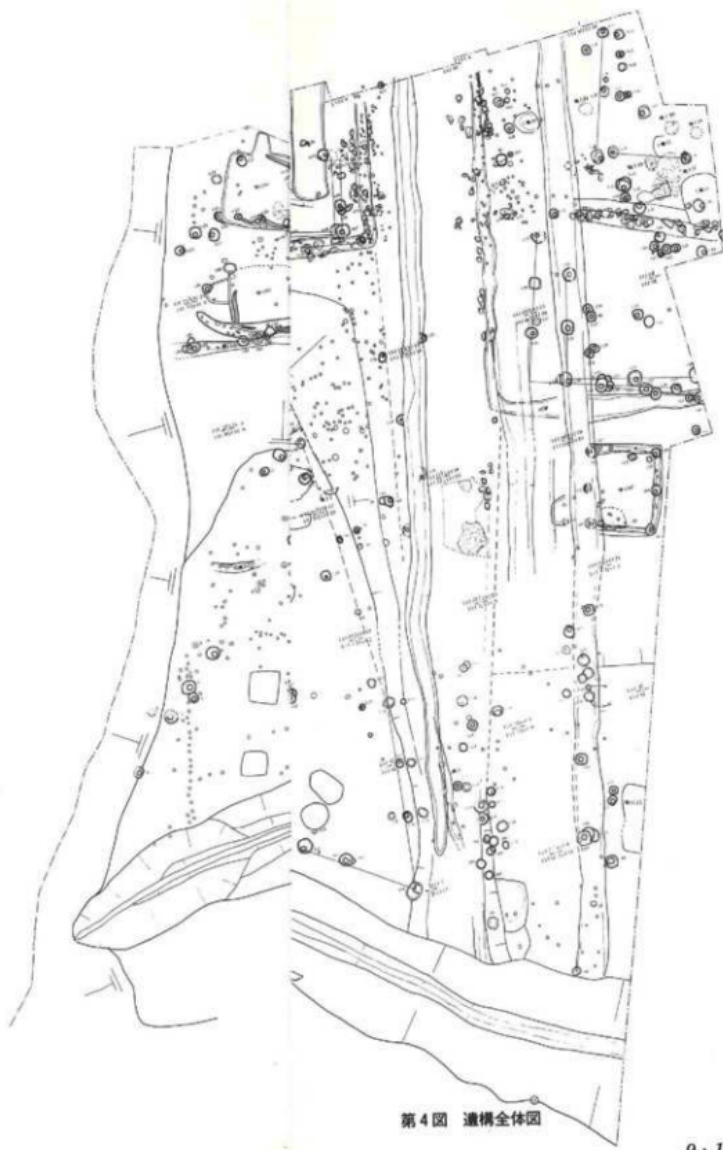


第3図 土層堆積状況図



表3 14J21・22・23 南北セクション東壁土層(C~C')

I	1	10YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	被土斜面 C少量 C少量 C少量 C少量 C少量
	2	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	3	10YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	4	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	5	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
II	1	7.5YR 5/4	褐色砂土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	被土斜面 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量
	2	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	3	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	4	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	5	7.5YR 3/7	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	6	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	7	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	8	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	9	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	10	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
III	1	7.5YR 5/4	褐色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	被土斜面 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量
	2	7.5YR 5/4	褐色色土主張	火山灰淤泥	被付	表面	ソフト	シカト	
	3	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	4	7.5YR 4/4	褐色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	5	7.5YR 4/4	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	6	H7YR 4/6	オドリローム主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	7	7.5YR 3/3	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	8	7.5YR 4/4	褐色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	9	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	10	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	11	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
	12	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ソフト	シカト	
IV	1	7.5YR 4/6	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	被土斜面 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量
	2	7.5YR 4/6	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	3	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	4	7.5YR 4/6	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	5	7.5YR 4/6	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	6	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	7	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	8	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	9	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	10	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	11	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	12	7.5YR 4/6	赤褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
V	1	7.5YR 3/7	褐色色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	被土斜面 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量 C微量
	2	7.5YR 4/4	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	3	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	4	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	5	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	6	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	7	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	8	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	9	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	10	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	11	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	
	12	7.5YR 4/3	褐色土主張	ローム	被付	表面	ハード	しまり有り	



第4図 遺構全体図



## II 遺構確認調査

### 1 調査目的

史跡上之国勝山館跡は、昭和54年以来、環境整備に伴う発掘調査を続けて20年目を迎える。本年は、館中心部の北東部に位置する第一平坦面の南西部800m<sup>2</sup>を調査した。

この地区の一部は、昭和63・平成元・2年度に調査を実施し、第二平坦面との間を分かつ二重の塹跡、数棟の掘立柱建物跡、竪穴建物跡等を検出している。

しかし、第二平坦面に比べ調査面積も限られており、第一平坦面の性格を窺うには不充分であった。又、第二・三平坦面同様、中央通路の存在が想定されていたにもかかわらず、後世の擾乱のため遺構が十分確認できなかつたこともあった。そのため過去の調査結果を補完する意味で、これら過年度調査区の隣接地区と、中央通路想定部分を調査区とした。

以上、本年度の調査目的は、第二・三平坦面で検出した中央通路の第一平坦面での有無と状況、第一平坦面の地割の展開状況、並びにそれらの地割の性格の解明を主眼とした。

### 2 検出遺構と出土遺物

#### (1) 位置・概要（第1・2図）

平成10年度調査区は、館主体部の第一平坦面、空塹B北西側に位置する。第一平坦面は1m～3mの比高差をもつ段があり、南半部と北半部に大きく分けられそうである。南半部はほぼ平坦な面であり、北半部は海側へ緩やかに低くなり、更に台地中央部から寺ノ沢・宮ノ沢方向に向かって傾斜状に低くなる。現在、この中央部には自然遊歩道があり、史跡内を見学するルートになつてゐる。

本年度は、4つの地割と掘立柱建物跡6棟、竪穴建物跡5棟、中央通路跡などを検出した。

#### (2) 層序（第3図・表1）

全体を概観すると北東方向の大手側に低くなる地形で、更に左右の沢方向にも低くなる。全体として南半部地区の空塹Bに接する平坦部は盛土により作られ、北半部地区は自然地形の落ち込みや斜面に、基盤礫や基盤粒を多量に含む土を使って盛土がなされている。

南半部地区平坦面の南部を中心に、一辺60cm～

1m前後の長方形の擾乱がある。特に14J16・21区付近では径90cm前後の円形の擾乱が重なり合つて多数ある。いずれも耕作時のものと思われる。14J21区付近では、表土下がすぐ貝層になり、中世の盛土整地などは見られず削平されている可能性が高い。空塹Bに接する調査区南半部地区的平坦面は、最大1.2m以上の盛土により作られていたことを改めて確認した（第29図）。二重の空塹や第二平坦面の切岸を作った時の排土を使って造成したと想定される。14K21区でも擾乱混じりの土や基盤礫混じりの盛土と想定される堆積を確認した（SPA～SPA'）。逆に14J15区付近の斜面はVI層のハドロームなので、切土して整形していると考えられる。

北半部地区13L19区付近の第一平坦面南西部の端部には1m前後の厚い盛土がなされ、この平坦部も盛土により沢側に作り出されていることがわかつた。

自然研究路がある14J17・22区付近では、館神八幡宮への参拝路であったり、農地への通路であったりしたため、近世以降の人の手が加わっているので、中央通路の想定部分が削平を受けていた。

#### (3) 掘立柱建物跡

調査の結果、南半部地区的平坦面で六棟を想定した。その内三棟は平成元年度のものと若干違いが生じた。第5図にその異同を示した。今後の再検討により変更になることもありうるので、現段階の試案として御承知いただきたい。北半部地区では六棟を想定しているが、地割全体を調査してはいないため確定できなかつた。この部分は(7)地割で述べるので、南半部地区検出の6棟の概要を述べる。

今回再調査の結果、平成元年度調査検出の柱穴の一部に遺構では無かったのではないかと思われるものがでてきた。過去の調査と今回の再確認調査で、今や完全に覆土が失われてしまっているものもあるので断言は出来ないが、盛土のブロックが覆土の様に見え、それを柱穴として認識してしまつたものが幾つかあるようだ。それらの柱穴を図面に記録し、報告されてしまっている例が若干ある。

**第1号建物跡**（第6図、PL 9-1）：南半部地区平坦面北側14K17区周辺に位置する。桁行三間、梁間二間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は5.01m × 4.24m。柱間寸法は、桁行方向五尺五寸等間。梁間方向は、七尺等間と想定される。

**第2号建物跡**（第7図、PL 9-1）：南半部地区平坦面北側14K17区周辺に位置する。桁行三間、梁間三間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は6.63m × 4.51m。柱間寸法は、桁行方向は七尺三寸等間、梁間方向は北から五尺三寸、四尺八寸、四尺八寸と想定される。

**第3号建物跡**（第8図、PL 9-1）：南半部地区平坦面南側14K16区周辺に位置する。柱穴の配置状況から三つの案が想定できる。

想定案1は、桁行四間、梁間三間、南北棟の建物跡を想定する。平面規模は8.72m × 6.00m。柱間寸法は桁行方向七尺二寸等間、梁間方向六尺六寸等間と想定される。

想定案2は、想定案1のものに柱筋の通る三間×一間の小さな建物が北隣に位置する、二棟並立案である。

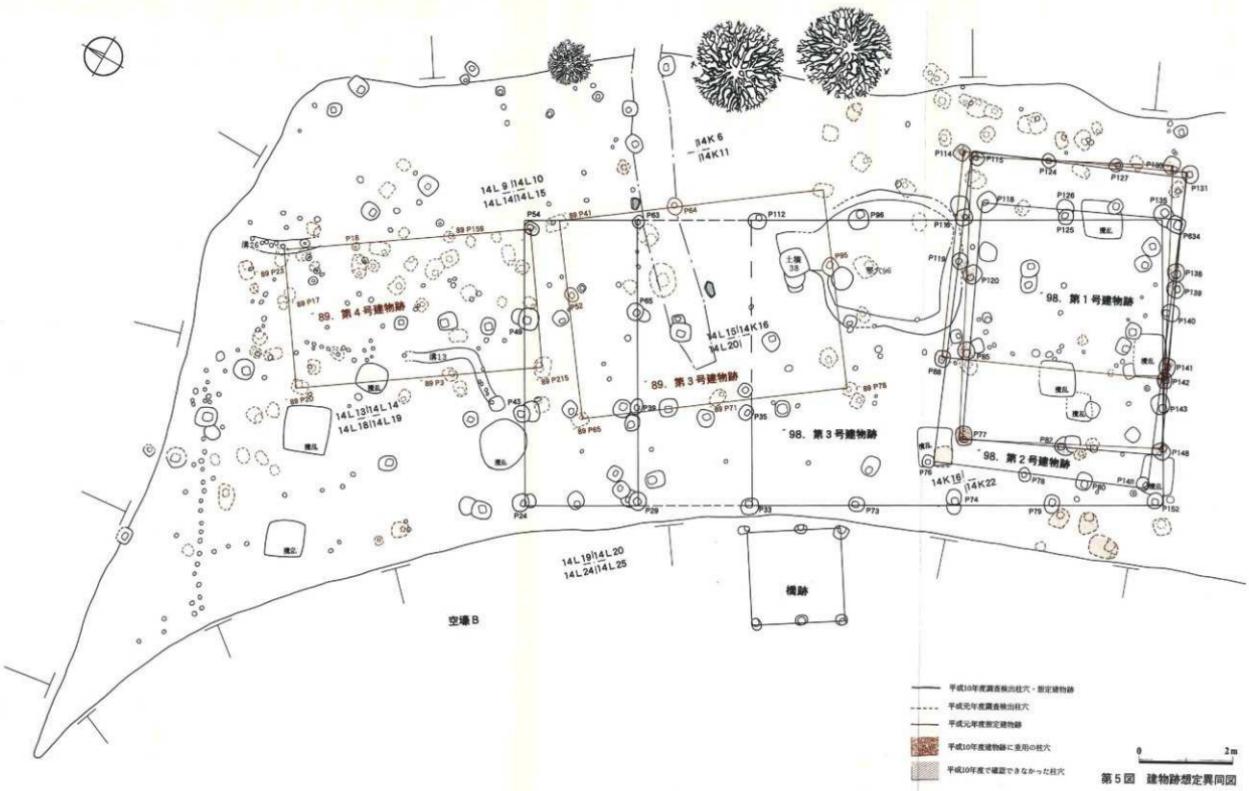
想定案3は、想定案2の二棟が桁行六間、梁間三間の一棟であると想定する。図上では想定案3で規模を表示している。しかし、P 33-29間、P 112-63の柱間寸法は七尺九寸という、かなり広い柱間となってしまうので、疑念が残る。いずれにしても今後再検討が必要である。

**第4号建物跡**（第9図、PL 9-3）：南半部

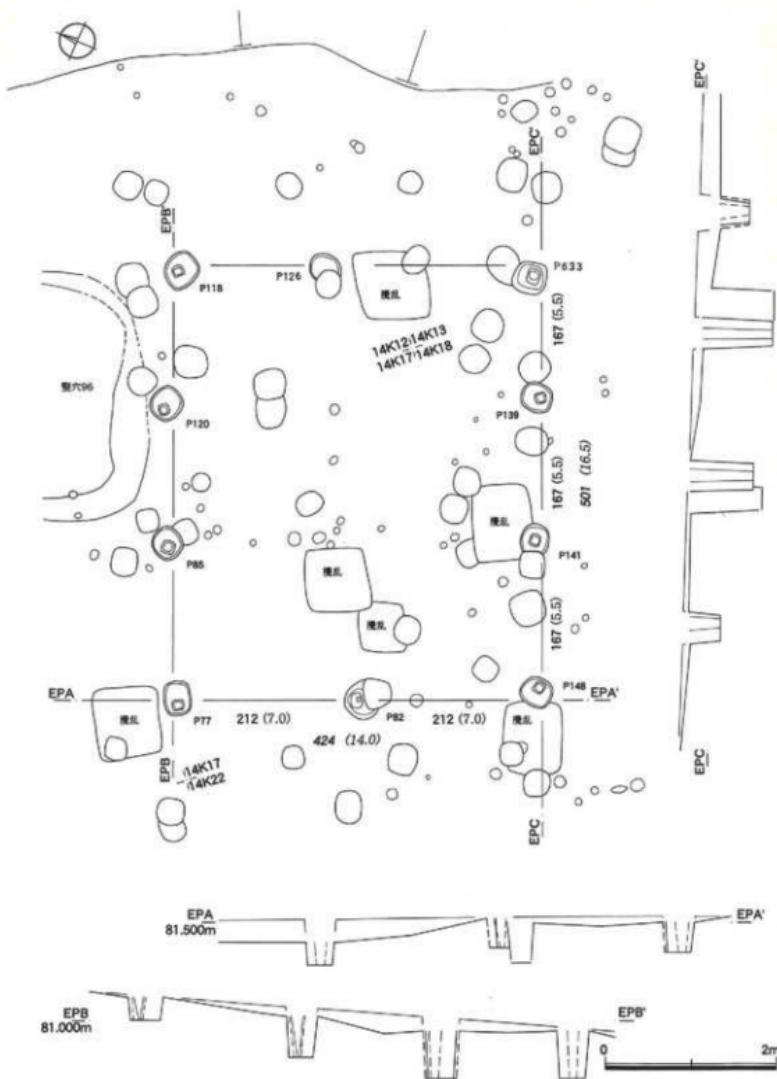
地区平坦面南側14K20区周辺に位置する。桁行三間、梁間三間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は5.37m × 4.44m。北東部は溝14等に切られ欠失していると考えられる。柱間寸法は、桁行方向は五尺九寸等間と想定される。梁間方向は西柱列では、ばらつきがあり、P 222-224では四尺、P 229-209間では五尺八寸となっている。また柱通りも悪く西側に開き気味である。西柱列P 224-229と東柱列の残存部分P 200-201間から四尺九寸等間を基準としていることも考えられるが、現段階では確定を留保したい。柱穴の切り合い関係から第5号建物跡より古いと考えられる。

**第5号建物跡**（第10図、PL 9-3）：南半部地区平坦面南側14K19区周辺に位置する。桁行三間、梁間二間、南北棟の総柱建物跡を想定した。平面規模は4.75m × 3.40m。柱間寸法は、桁行方向は、北から四尺七寸、四尺七寸、六尺三寸。梁間方向は、五尺六寸等間と想定される。柱穴の切り合い関係から6号建物跡より古いと考えられる。

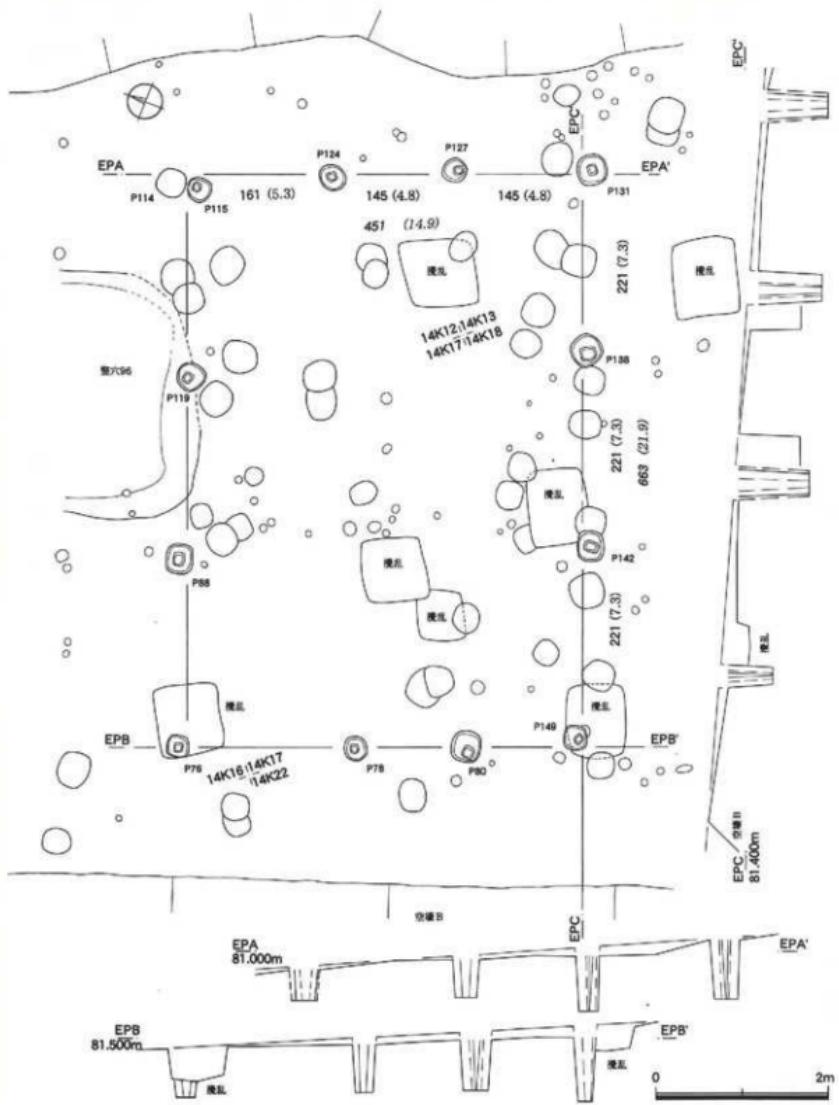
**第6号建物跡**（第11図、PL 9-3）：南半部地区平坦面南側14K25区周辺に位置する。桁行四間、梁間二間、南北棟の建物跡を想定した。平面規模は7.28m × 4.60m。柱間寸法は、桁行方向は、六尺等間。梁間方向は、七尺六寸等間と想定される。柱穴の切り合い関係から第4・5号建物跡より新しいと考えられる。



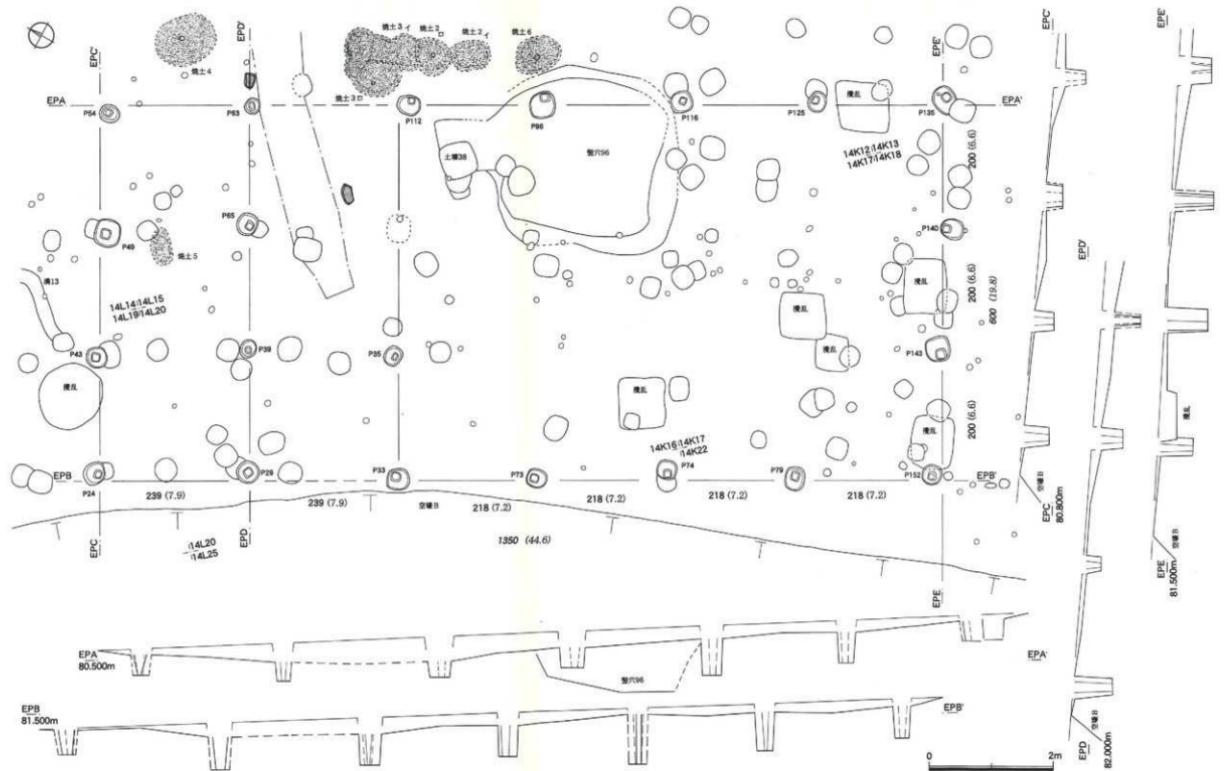
第5回 建物跡想定異同図



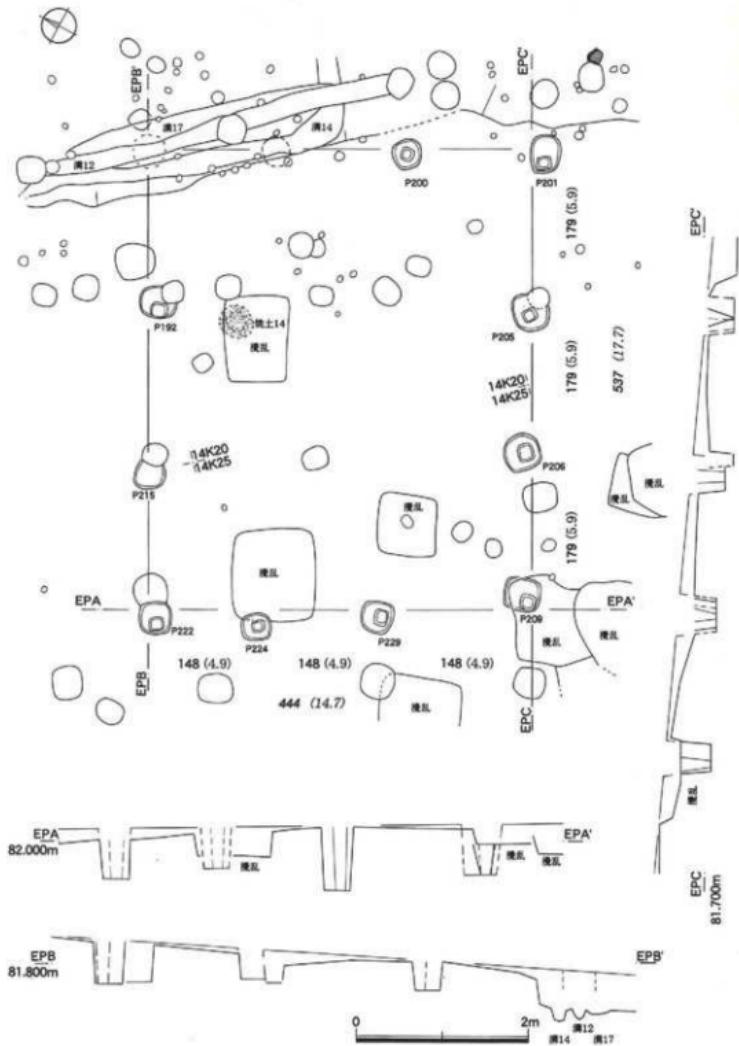
第6図 第1号建物跡想定図



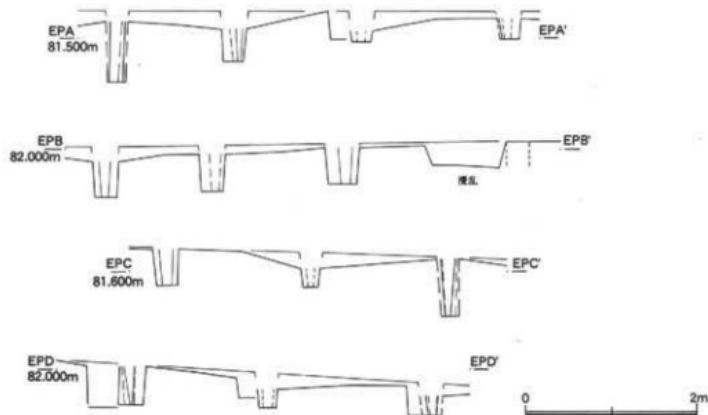
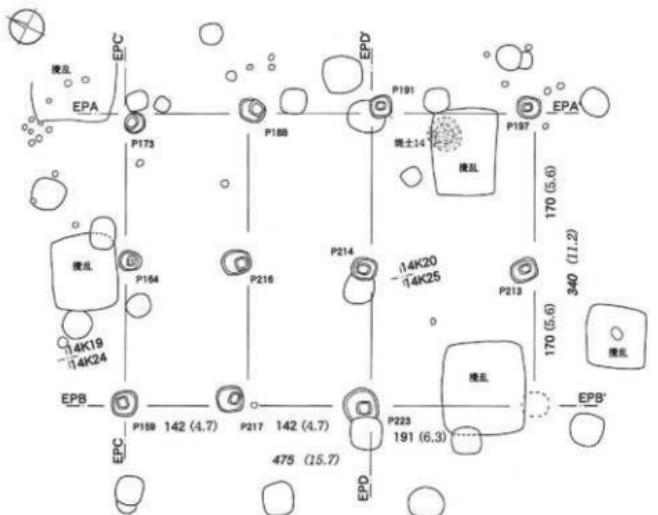
第7図 第2号建物跡検定図



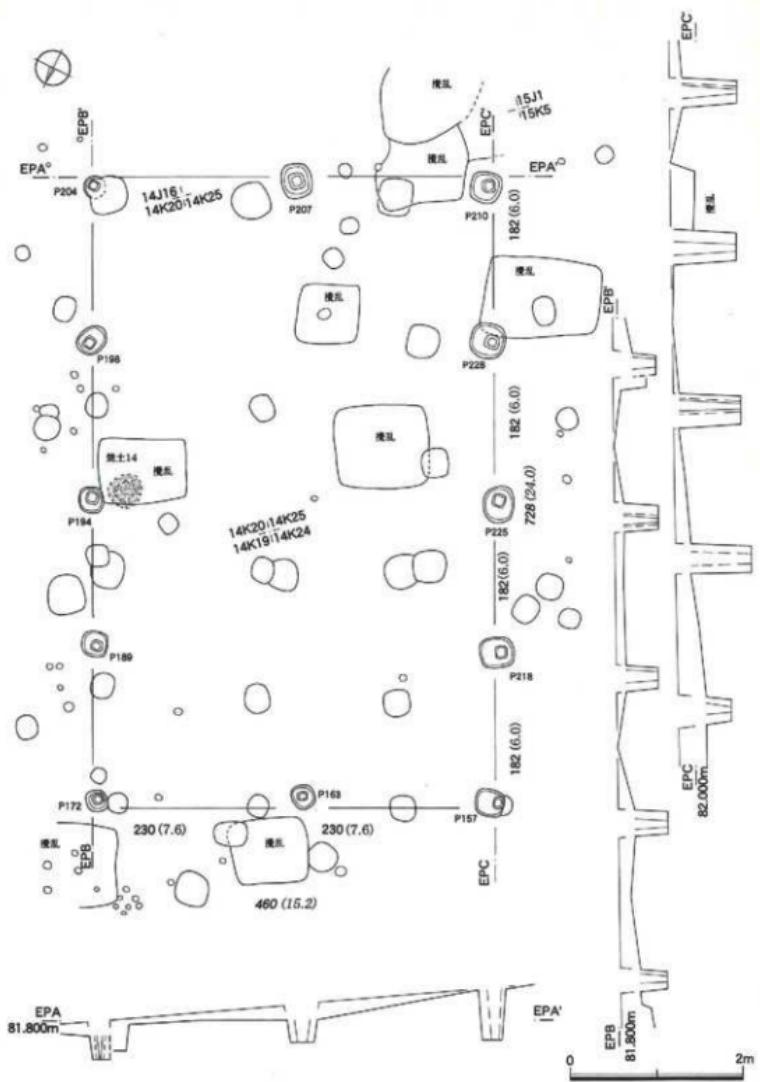
第8図 第3号建物跡想定図



第9図 第4号建物跡想定図



第10図 第5号建物跡想定図



第11図 第6号建物跡想定図

#### (4) 穴穴建物跡

南部地区西側で一棟、北部地区東側で一棟、北部地区西側で三棟の計五棟を検出した。内三棟は柱穴の重複や数から、建て替えが想定される。

第94号 穴穴建物跡（第12図、表4、PL. 10-1・2・3）：14L 4区周辺に位置する。平面規模は長辺2.15m、短辺2.05m、北西方向に出入りと想定される張り出し部がある。溝4などに切られている。東壁側部分を除いた床面に溝を検出した。

柱位置が想定される場所には掘方は見られず、径8cm前後の円ないしは梢円形状で、深さ10~20cmの小さな柱痕跡しか確認できなかったので、打ち込み式の柱の可能性がある。

出土遺物 越前擂鉢、釘がある。越前擂鉢は口唇部が丸みを帯びており、15世紀末葉位に位置付けてよさそうである。

第95号 穴穴建物跡（第13図、表5、PL. 10-1・4・5）：13L 24区に周辺に位置する。平面規模は長辺2.45m、短辺2.35m、北東方向に出入りと想定される張り出し部がある。隅柱の数からから建て替えが行われたことが想定できる。北壁側部分を除いて床面に溝を検出した。南西部に炭化物の集中箇所を検出した。入口部分は盛土のため確認が困難であった。やや細身の観があるので、南北方向の幅に掘り残しがあるのかもしれない。

出土遺物 青磁稲花皿、青磁碗、染付玉取壽子文端反皿二個体、瀬戸美濃灰釉端反皿、瀬戸美濃灰釉稲花皿二個体（見込に印花あり）、越前甕、釘、一端に径2ミリ程の穴が二つある針、咸平元寶がある。

第96号 穴穴建物跡（第14・15図、表6・7、PL. 11）：14K 11区周辺に位置する。平面規模は長辺2.5m、短辺2.45m、北西方向に出入りと想定される張り出し部がある。出入り南西部には土壠38cmに切られている。発見当初は、茶で示した範囲（第15図）を検出し、焼失の穴穴建物跡が盛土とほぼ同じ土で埋められてると考えた。プラン確認後、四分割で調査を開始。上半部は基盤礎・粒が多量に混じる土で、盛土とほぼ同じ土であり、一気に埋め立てられたと考えられる。その下には炭化物層が2枚ある。この炭化物層は穴穴の掘方を越えて堆積し、発見当初の炭化物範囲となる（PL. 11-1）。掘方を越え堆積する炭化物を精査したところ、穴穴床面からほぼ垂直に立ち上がり

る壁が、上方でラッパ状に広がりその直上に炭化物が堆積していることを確認した。又、炭化物は不明溶物などが多量に混じるものであることが判明した。

上記の現象から穴穴廃絶後、その窓みを利用して炭化物を捨てたが、その過程で壁面が崩れラッパ状に広がり、それを越えて炭化物が堆積したため、穴穴の掘方より大きく炭化物が検出されたと思われる。

炭化物層の直上で、かわらけが出土した（PL. 2-3）。又、遺物の殆どが炭化物層の直上、直下で出土している。北壁側を除く床面に溝を検出した。又、北・東壁付近で炭化した茅材を検出した（PL. 11-2・7・8）ので、焼失住居の可能性も考えられる。柱穴の数から建て替えが考えられる。

出土遺物 瀬戸美濃灰釉蓮弁文丸碗2個体（内1個体は第30図21）、瀬戸美濃灰釉端反皿5個体以上（内1個体は同16）、かわらけ2個体（同23）、越前甕、三目札を含む小札、釘、鍋、砥石などがある。

灰釉皿は少なくとも5個体分あり、内1点は口縁部が波を打つ形態の稜花皿（PL. 18-2-3）で、他は端反皿である。銅銭は景祐元寶の他17枚ある。中には非常に薄いものがあり、「無文銭」の可能性がある。

穴穴を覆う炭化物をサンプリングし、水洗いした結果微細遺物を検出した。炭化種子、魚骨片などがある。特に殿作業の際に出る溶物と思われるものを多量に検出した。粒状のもの、表面が網の目状を呈する繊維のものと大きく分かれ。今後の分析を必要とする。

第97号 穴穴建物跡（第16図、表8、PL. 12-1-4）：14J 24区周辺に位置する。北壁部分が幕末期の溝に切られて不明瞭になっているが、平面規模は長辺2.8m、短辺2.5m、北方向に出入りと想定される張り出し部がある。柱穴は四隅と東西柱筋の間にあり、計6つ検出した。平面規模は、本年度検穴建物跡の中で最大である。床面の北西部に炭化物の集中箇所を検出した。炭化種子、魚骨片少量を検出している。北壁側部分を除く床面に溝を検出した。北西部の覆土中位で培塿片が大量に出土した（PL. 12-1・2）。いずれも、熱を受け溶解している上に、細片になっているも

の多く、接合はあまりできなかった。観察の結果、少なくとも10個体以上はあると推測する。他の遺物も覆土中位を中心に出土している。

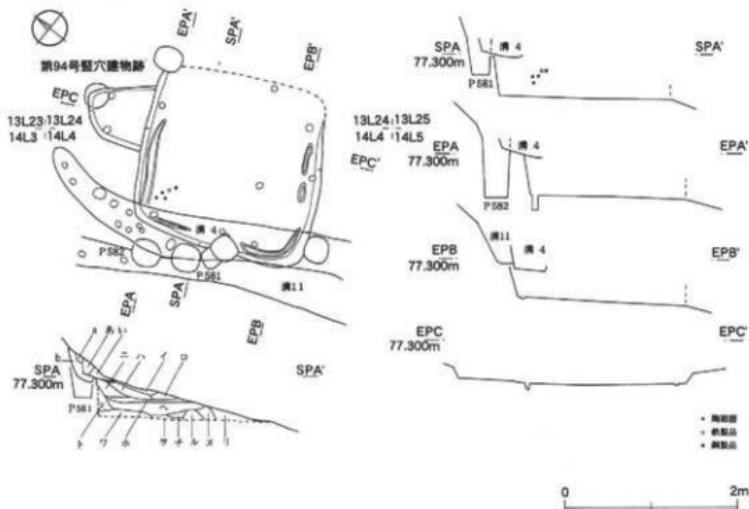
出土遺物 青磁穂花皿、白磁壺反皿、赤絵碗、口縁部が強く括れる瀬戸美濃鉄釉碗（大窯Ⅱ期）、刀子、小札、苧引金、錠金具（第32図12）、鍋、釘、鉗、銅鏡、砥石、埴輪片（PL. 20-3・4）、双六駒（第33図16-19）、中柄と思われる骨角器（第33図12）などがある。

埴輪は全て土製品で、径や深さにバリエーションが見られる。綠青の様なものが噴いており、銅用のものかとも推測されるが、結論は化学的分析を待ちたい。表面に粗の圧痕の様なものが観察できる。胎土は礫粒と繊維が混じり、中には米と見られる粒状のものが混入しているものがある。

第98号竪穴建物跡（第17図、表2、PL. 12-5・6）：14J 6区に位置する。平面規模は歪な長方形で長辺2.5m、短辺2.2m、北西方向に出入口と想定される張り出し部がある。また、北壁西側には段を有する。北壁側床面に柱穴間を繋ぐような溝を検出した。柱穴の数から最低でも2回以上の立て替えが行われたことが想定できる。柱穴だけではなく壁の位置まで変えたので、歪な平面形を呈しているように見えるのであろう。

土壤41と切り合い関係にあり、土壤41より古い遺構と考えられる。

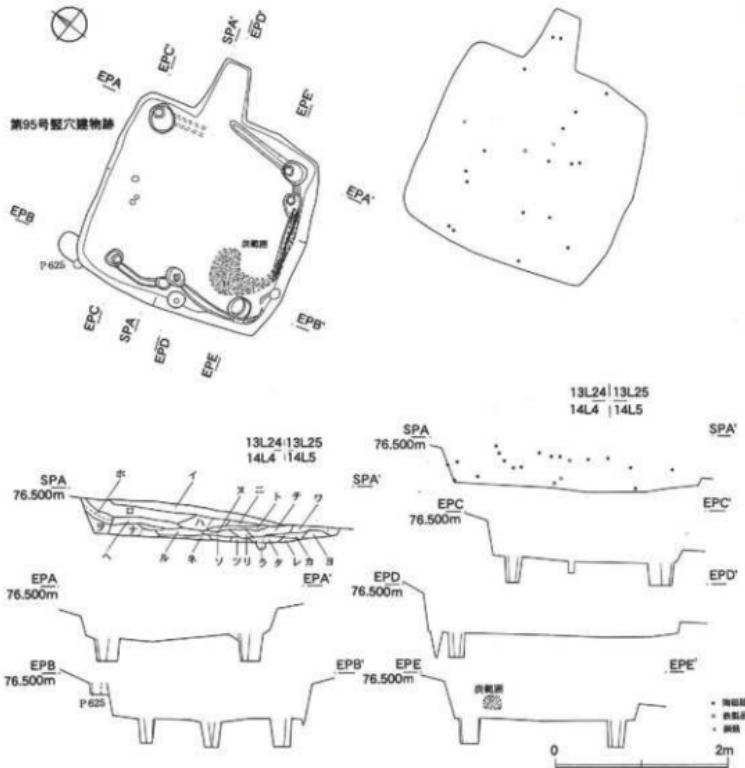
出土遺物 瀬戸美濃灰釉穂花皿、口縁部が鋭角で内削ぎ気味の越前摺鉢、小札、鍋、釘、元祐通寶、中柄または刺突具と思われる骨角器がある。



第12図 第94号堅穴建物跡平面図他

表4 第94号堅穴建物跡土層観察表

イ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	砂利多量	瓦礫少量	ハード	ハード	C少量	
ロ	10YR 5/4	褐褐色土主体	ローム粒	砂利多量	瓦礫多量	(イ)より少しソフト		C少量	
ハ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫多量	やや軟質	しまり有り	C少量	
ニ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック少量	ローム粒	砂利少量	(II)より少しソフト		C少量	
ホ	10YR 3/2	暗褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫少量	ハード		C少量	
ヘ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック40%		瓦礫	ハード		C少量	
レ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック		瓦礫	ハード		C少量	
テ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	鐵紅	瓦礫少量	ハード		C少量	
リ	10YR 4/4	暗褐色土主体	ロームブロック	鐵紅	瓦礫少量	(II)より少しソフト		C少量	
ヌ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック	鐵紅	瓦礫	ハード		C少量	
ヌ	10YR 3/2	暗褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫	ハード		C少量	
ル	10YR 3/2	暗褐色土主体	ローム粒	砂利(10%)	瓦礫	中やソフト		C少量	
ヲ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫少量	中やソフト		C少量	
ウ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	砂利	瓦礫0%?	ハード		C少量	
ツ	10YR 3/4	褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫少量	柔軟		C少量	
ツ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	砂利	瓦礫少量	柔軟		C少量	
ツ	10YR 4/4	褐色土主体	ローム粒少量	砂利	瓦礫少量	柔軟		C少量	
ツ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	砂利	瓦礫多量	(I)より柔質		C少量	



第13図 第95号堅穴建物跡平面図他

表5 第95号堅穴建物跡土層観察表

ゾーン	地質学的特徴	堆積物	地質学的特徴	堆積物	地質学的特徴
ゾーンA	10Y R 4/3 黄褐色土主張	ロームブロック	高密度		C少量
ゾーンB	10Y R 4/4 4/6 黄褐色土主張	ロームブロック	高密度	ハイド	地土粒
ゾーンC	10Y R 4/4 黄褐色土主張	ロームブロック	高密度		地土粒少
ゾーンD	10Y R 4/4 黄褐色土主張	ロームブロック	高密度		地土粒
ゾーンE	10Y R 3/2 3/3 黄褐色土主張	ロームブロック	高密度		地土粒
ゾーンF	10Y R 3/2 黑褐色土主張	ローム粒	中やソフト	(O) よりすこしソフト	地土粒
ゾーンG	10Y R 3/2 黑褐色土主張	ローム粒	中やソフト	(O) よりすこしソフト	地土粒
ゾーンH	10Y R 3/2 黑褐色土主張	ローム粒	中やソフト	C少量	地土粒少
ゾーンI	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	測定少量	五軟弱少量	地土粒少
ゾーンJ	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	測定少量	印致じり 高密度	地土粒
ゾーンK	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	測定少量	印致じり 高密度	地土粒
ゾーンL	10Y R 3/2 2/3 黑褐色土主張	ローム粒 大穴灰	測定少量	ソフト	C少量
ゾーンM	10Y R 3/2 黑褐色土主張	ローム粒 大穴灰	測定少量	印致じり 高密度	地土粒
ゾーンN	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	測定少量	ソフト	地土粒少
ゾーンO	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	測定少量	地土粒少	地土粒少
ゾーンP	10Y R 4/3 黄褐色土主張	ローム粒	高密度	中やリード	地土粒少
ゾーンQ	10Y R 4/3 黄褐色土主張	ローム粒	高密度	中やリード	地土粒少
ゾーンR	10Y R 4/3 黄褐色土主張	ローム粒	高密度	中やリード	地土粒少
ゾーンS	10Y R 3/2 黄褐色土主張	ローム粒	ソフト	地土粒	
ゾーンT	10Y R 4/4 黄褐色土主張	ローム粒 砂質土	測定少量	ソフト	
ゾーンU	10Y R 4/4 黄褐色土主張	ローム粒 砂質土	測定少量	ソフト	
ゾーンV	10Y R 2/2 黑褐色土主張	ロームブロック	高密度	ソフト	地土粒
ゾーンW	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ロームブロック・灰	高密度	ハイド	地土粒
ゾーンX	10Y R 3/4 黑褐色土主張	ローム粒少量	高密度少量	ハイド少	地土粒少

14L10/14K6  
14L15/14K11



SPA  
80.500m

SPA'

SPB

SPA

EPA

EPB

SPA'  
EPB'

14L15/14K11  
14L20/14K16

第96号竪穴建物跡

SPB

EPB

SPB

4  
7  
11  
12  
13  
14  
15  
16

SPB  
80.500m

EPA'

SPA

EPA  
80.500m

SPA'

EPB  
80.500m

EPB'

14K11  
14K16

SPA  
80.500m

SPA'

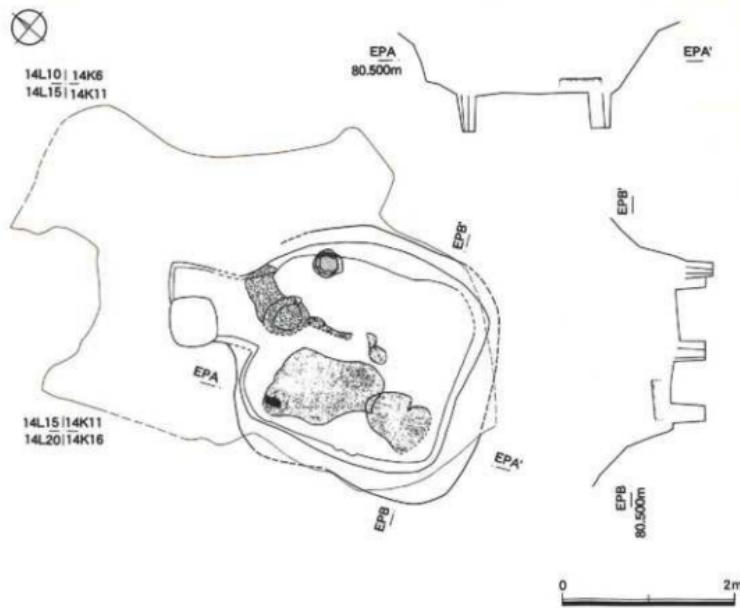
SPA  
80.500m

SPA'

- 海貝殻
- ◆ 小わらび
- ▲ 砂製品
- 鋼鐵
- △ 石製品
- ◆ 自然遺物

0 2m

第14図 第96号竪穴建物跡平面図他



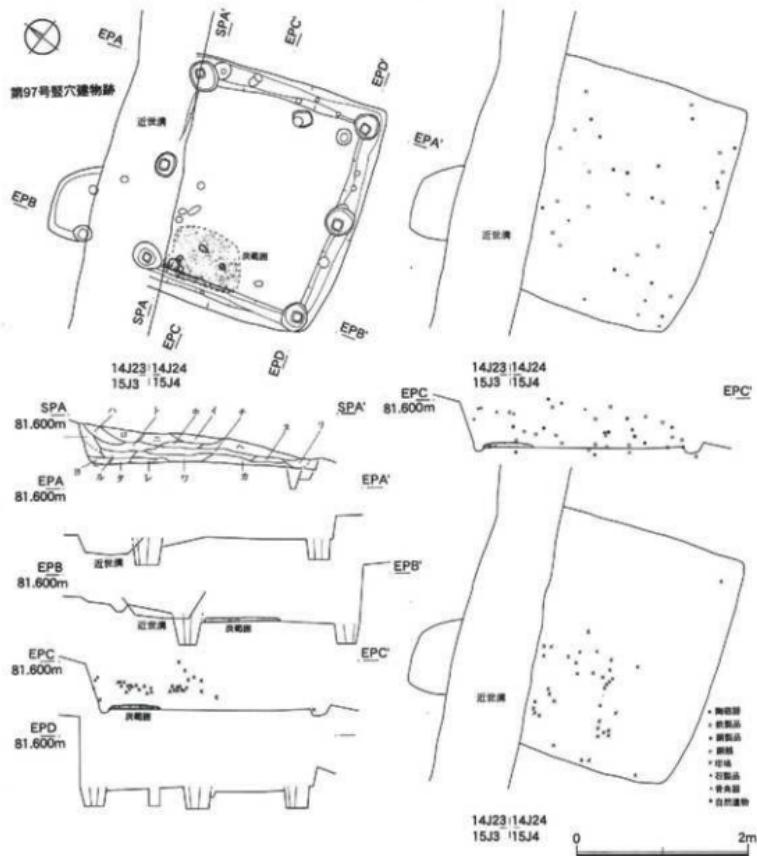
第15図 第96号豊穴建物跡・焼土範囲平面図

表6 第96号豊穴建物跡南北セクション東壁（SPA～SPA'）土層観察表

	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面
イロ	10YR 3/3	ローム主体	10YR 3/3	高発熱・粒や少多	10YR 3/3	ハード	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土の量	10YR 3/3	底土粒少量
ムクニ	10YR 3/3	高発熱主体	10YR 3/3	高発熱	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ニニ	10YR 3/3	褐色色土主体	10YR 3/3	高発熱	10YR 3/3	少	10YR 3/3	少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
タケシ	10YR 3/3	トーピナイト主体	10YR 3/3	高発熱	10YR 3/3	少	10YR 3/3	少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
アケシ	10YR 3/3	高発熱主体	10YR 3/3	高発熱	10YR 3/3	少	10YR 3/3	少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
チテ	10YR 2/2	高発熱主体	10YR 2/2	高発熱	10YR 2/2	少	10YR 2/2	少	10YR 2/2	底土粒少量	10YR 2/2	底土粒少量
トリ	10YR 4/4	壁土・既伐物主体	10YR 4/4	高発熱多量	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	底土粒少量	10YR 4/4	底土粒少量
ヌル	10YR 4/4	高発熱主体	10YR 4/4	高発熱多量	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	底土粒少量	10YR 4/4	底土粒少量
タカ	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	底土粒少量	10YR 4/4	底土粒少量
ミ	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	ソフト	10YR 4/4	底土粒少量	10YR 4/4	底土粒少量
				基盤熱多量		基盤熱多量		基盤熱多量		基盤熱多量		
	10YR 2/1	高発熱主体	10YR 2/1	高発熱多量			10YR 2/1	中や少	10YR 2/1	中や少	10YR 2/1	中や少
	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量			10YR 4/4	少	10YR 4/4	少	10YR 4/4	少
	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量			10YR 4/4	少	10YR 4/4	少	10YR 4/4	少
	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量			10YR 4/4	少	10YR 4/4	少	10YR 4/4	少
	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量			10YR 4/4	少	10YR 4/4	少	10YR 4/4	少
	10YR 4/4	ローム主体	10YR 4/4	高発熱多量			10YR 4/4	少	10YR 4/4	少	10YR 4/4	少
				基盤熱少多								
				基盤熱少多								
				基盤熱少多								
				基盤熱少多								
				基盤熱少多								

表7 第96号豊穴建物跡東西セクション北壁（SPB～SPB'）土層観察表

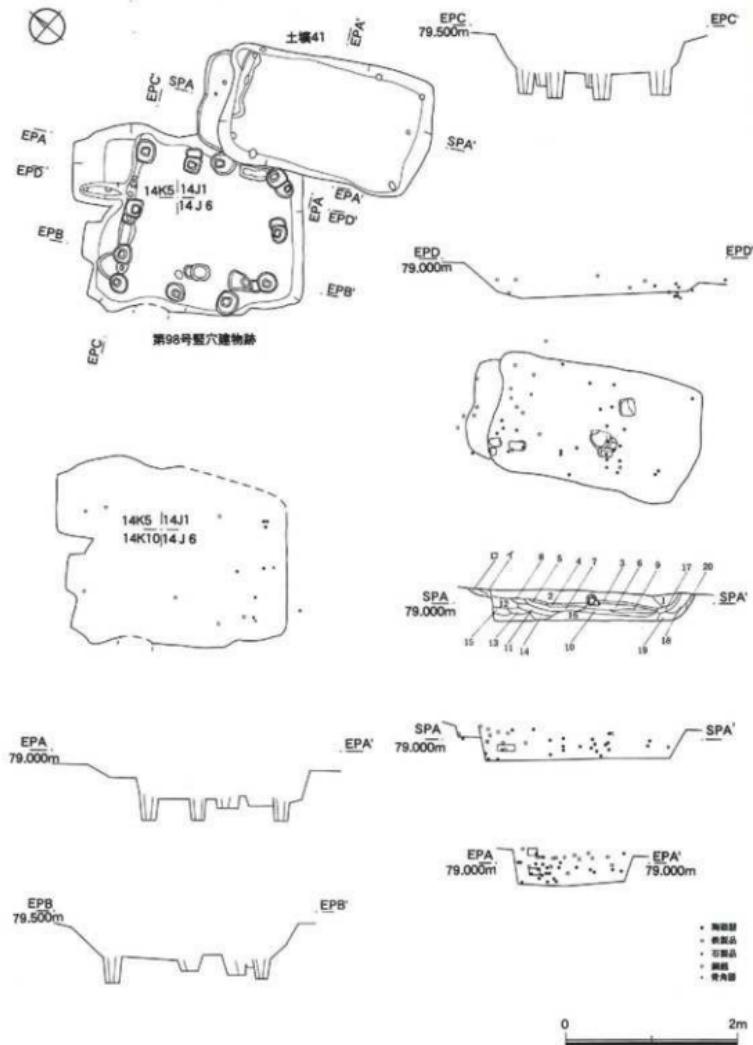
	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面	層別	断面
ハ	10YR 3/3	褐褐色土主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
二	10YR 4/6	ローム主体	10YR 4/6	高発熱多量	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	底土粒少量	10YR 4/6	底土粒少量
ム	10YR 4/6	ローム主体	10YR 4/6	高発熱多量	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	底土粒少量	10YR 4/6	底土粒少量
タ	10YR 4/6	ローム主体	10YR 4/6	高発熱多量	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	底土粒少量	10YR 4/6	底土粒少量
レ	10YR 4/6	ローム主体	10YR 4/6	高発熱多量	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	中や少	10YR 4/6	底土粒少量	10YR 4/6	底土粒少量
ツ	10YR 2/1	高発熱主体	10YR 2/1	高発熱多量	10YR 2/1	中や少	10YR 2/1	中や少	10YR 2/1	底土粒少量	10YR 2/1	底土粒少量
キ	10YR 3/3	褐褐色土主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ミ	10YR 3/3	褐褐色土主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
タ	10YR 3/3	褐褐色土主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ダ	10YR 3/3	褐褐色土主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ウ	10YR 3/3	ローム主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ス	10YR 3/3	ローム主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ノ	10YR 3/3	ローム主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量
ミ	10YR 3/3	ローム主体	10YR 3/3	高発熱多量	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	中や少	10YR 3/3	底土粒少量	10YR 3/3	底土粒少量



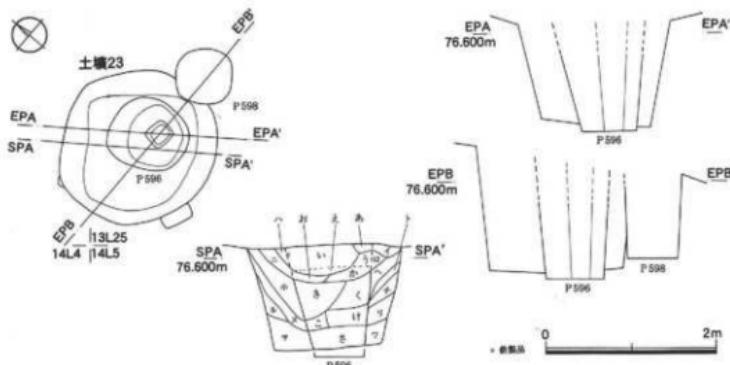
第16図 第97号竖穴建物跡平面図他

表8 第97号竖穴建物跡土層観察表

イ	10YR 3/2 暗褐色土主体	粘質土	無	無	ハード	C	供土粒
ロ	10YR 3/2 ロームブロック	ロームブロック 10% 粘質土	石 砂少量	中硬	中硬	C	供土粒
ハ	10YR 3/2 3/4 暗褐色土主体	ロームブロック 10% 粘質土	砂利少量	中硬	中硬	C	供土粒少量
二	二	ローム	砂利少量	中硬	中硬	C	供土粒少量
ホ	10YR 3/2 4/4 黄褐色土主体	砂利	砂利少量	中硬	中硬	C	供土粒少量
ヘ	10YR 4/3 黄褐色土主体	ロームブロック 10%	砂利	中硬	中硬	C	供土粒少量
ト	10YR 3/3 暗褐色土主体	ローム	基盤層	中硬	中硬	C	供土粒少量
チ	10YR 3/3 暗褐色土主体	ローム	砂利少量	中硬	中硬	C	供土粒少量
リ	10YR 3/4 暗褐色土主体	ロームブロック	砂利	中硬	中硬	C	供土粒少量
ル	10YR 3/4 暗褐色土主体	ローム	砂利少量	中硬	中硬	C	供土粒少量
タ	10YR 3/4 4/4 暗褐色土主体	ロームブロック	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒少量
ワ	10YR 4/4 暗褐色土主体	ロームブロック ローム粒	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒少量
カ	10YR 4/4 4/4 暗褐色土主体	ロームブロックや中硬	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒少量
リ	10YR 3/4 暗褐色土主体	ローム	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒少量
タ	10YR 2/3 暗褐色土主体	ローム	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒
レ	10YR 3/3 暗褐色土主体	ローム	砂質土	中硬	中硬	C	供土粒



第17図 第98号竖穴建物跡・土壤41平面図他



第18図 土壌23平面図他

表9 土壌23土層観察表

イ	10YR 3/4 褐色土主床	ローム10%	鉄鉱少量	イ(つ)より少し粘質	C	地土性
ロ	黄土なし					
ハ						
ニ	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム少少量	鉄鉱少量	しまり有り		
ホ	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム10%30%	鉄鉱少量	(二)より粘質	C少量	
ヘ	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム多量	鉄鉱少量	ソフト		
テ	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	やや粘質		
リ	10YR 3/4 褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	ハード 粘土質		
ヌ	10YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	粘質		
ダ	7.5YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	ハード 粘土質		
ワ	7.5YR 4/4 褐色土主床	全層ローム	鉄鉱少量			
サ	7.5YR 4/4 褐色土主床	全層ローム	鉄鉱少量			
ス	10YR 3/4 暗褐色土主床	ローム10%30%	鉄鉱少量	イ(つ)より少し粘質	C	地土性
ウ	黄土なし					
ス	10YR 3/4 暗褐色土主床	ローム少量	鉄鉱多量	(二)より少しソフト		
お	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	やや粘質		
か	10YR 3/2 暗褐色土主床	ローム10%40%	鉄鉱少量	ソフト 粘	C	
き	10YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	(二)より少しハード	C	
け	10YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	鉄鉱少量	ソフト	C少量	
こ	10YR 3/4 暗褐色土主床	ローム多量	火山灰20%	ソフト	C少量	
自	10YR 7/7 にじく黃褐色	全層火山灰		ソフト	C	

表10 土壌41土層観察表

1	7.5YR 4/4 ハーブローム主床	ハーブローム	鉄鉱少量	中やハード	C少量	地土的重量
2	7.5YR 4/3 褐色土主床	ローム少量	ソフト	C少量	地土的重量	
3	7.5YR 3/3 暗褐色土主床	ソフトローム	ソフト	C少量	地土的重量	
4	7.5YR 3/3 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	C少量	地土的重量	
5	7.5YR 3/1 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	C少量	地土的重量	
6	7.5YR 2/2 暗褐色土主床	ソフトローム 黑色土	火成岩少量	ソフト	C少量	地土的重量
7	7.5YR 2/2 褐色土主床	ソフトローム	黒色土	ソフト	C少量	地土的重量
8	7.5YR 2/2 褐色土主床	ソフトローム	黒色土	ソフト	C少量	地土的重量
9	7.5YR 2/2 褐色土主床	ローム少量	ソフト	全層のみ有り	地土的重量	地土的重量
10	7.5YR 2/2 褐色土主床	ローム少量	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
11	7.5YR 4/3 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
12	7.5YR 4/3 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
13	7.5YR 4/3 褐色土主床	ハーブロームブロック状	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
14	7.5YR 4/3 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
15	7.5YR 4/3 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
16	7.5YR 4/3 ソフトラーム主床	ハーブロームブロック状	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
17	7.5YR 3/2 暗褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
18	7.5YR 3/2 褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
19	7.5YR 3/2 暗褐色土主床	ソフトローム	ソフト	ソフト	ソフト	地土的重量
20	7.5YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	中やハード	中やハード	C少量	地土的重量
イ	7.5YR 4/4 褐色土主床	ローム少量	中やハード	中やハード	C少量	地土的重量
ロ	7.5YR 3/4 暗褐色土主床	ローム少量	ソフト	ソフト	C少量	地土的重量

## (5) 土壌

第一平坦面北半部地区には多く見られ。南半部地区は三基のみと少ない。

土壤23（第18図・表9・PL. 13-1）：13L 25区に位置する。平面形は径90cmの円形状である。深さ60cm。土壌覆土中に柱穴P596が掘り込まれている。P596が中央付近に掘り込まれているため堆積状況は分かれづらい所が多い。残存部を見ると幾つかの層の流れがあり、入り乱れた堆積状況を観察できないので、一気に埋め戻されたものでは無いと推測する。覆土中より炭化種子、魚骨片、不明溶解物を少量検出した。遺物は青磁碗片1点が出土している。

土壤41（第17図・表10・PL. 12-7・8）：14J 1区に位置する。長辺2.35m、短辺1.45m、深さ35cm。覆土中位に炭化物を多量に含んだ（土層図6・7・9・15ブロック）層が堆積する。底面四隅でピットを検出した。土留めの壁などの構築物が推測される。北側には幅30cm、深さ4cm程度の段を有する。

出土遺物 青磁碗、白磁端反皿、見込に吉祥文字をデザインした碁筒底染付皿、染付碗（第30図12）、灰釉端反皿、灰釉連弁文丸碗、口唇部が玉縁状に作られる鉄釉碗（大窓I）、口縁部の括れの弱い鉄釉碗（同）、越前擂鉢・甕、砥石（第34図1）、釘、小札などがある。

サンプリングした覆土中より魚骨片、米・小豆などの炭化した種子、不明溶解物などを検出した。

平成9年度調査でも床面にピットがある同様の土壌（土壤1）を検出したが、遺物の量に違いがあり、堆積土に炭化物層が無いので、性格が違うのかもしれない。

土壤48（第19-21図・表11-13・PL. 2-2・15）：14K 15区に位置する。長辺80cm、短辺70cm、深さは残存部で最大17cmを測る。長方形を呈する。この付近は立木があり、根による攪乱などがあり、遺構を捉えるのは困難な場所であった。西部分はP178に切られている。

14K 15区付近の盛土を調査したところ黒色土の範囲を検出した。土壌を想定し、半裁したところ銅鏡が複数出土し（PL. 15-1）、完掘までに計74枚が出土した（PL. 15-2）。また、前述の立

木の根による攪乱で若干の移動が想定される。第19図の図上的一部分は、それと考えることもでき、参考までに図示した。

堆積状況から明瞭な立ち上がりを確認できなかったが、鉄に木片が付着していたこと、釘（第20図1・2）が2点出土していることから木箱に納められていた可能性があると考えられる。堆積状況からは箱部分を想定する立ち上がりを確認できなかったが、底部に付く段が箱の位置の痕跡と考えられる。

出土遺物 銭種は13種74枚を確認した（表13）。唐銭1種、北宋銭10種、明銭2種がある。鏽や擦れのため一部判読できなかったが、判読可能な範囲で字体などの特徴から予想される銭名を参考までに掲げた。最古銭は開元通寶（初鑄年、621年）で、出土枚数は17枚と最も多い。最新銭は永楽通寶（初鑄年、1408年）である。洪武通寶の10枚の内2枚は、背面右に「一錢」と記されている（第21図14・17）。径は22mmで、12・13・15・16の24mm洪武通寶と比べると幾分小さい。孔も外形は方形になっているが、内形は円形を呈する。観察の結果、無文銭と思われる銭は特に見い出せなかつたが、模倣銭も含めて検討の余地がある。

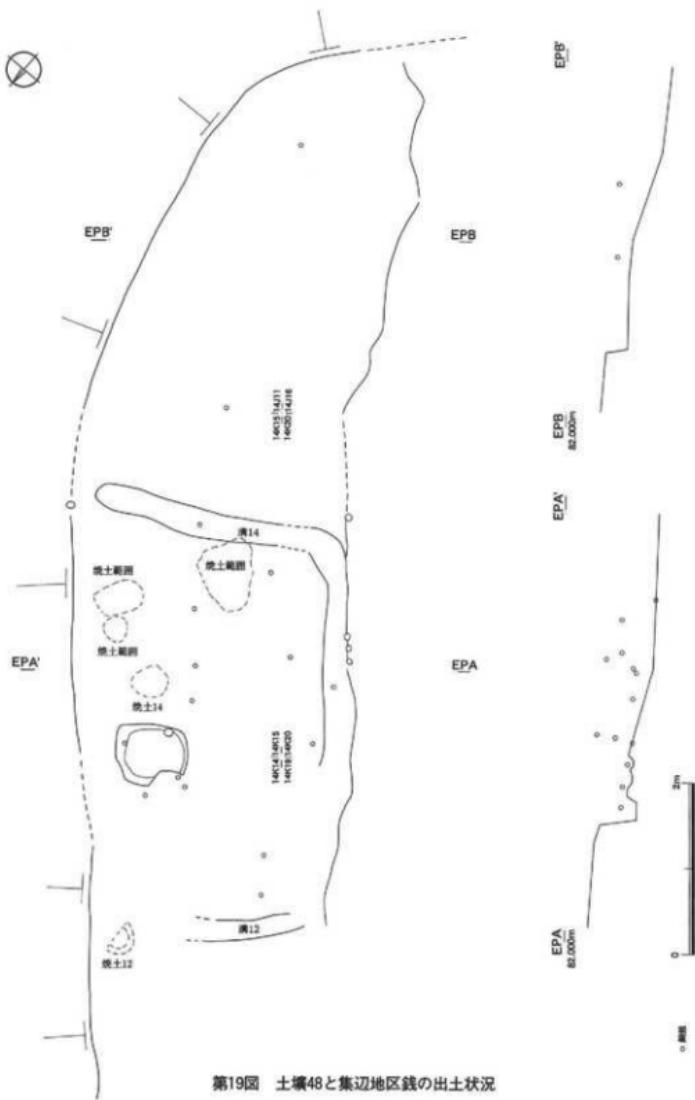
上記の土壌の他にも形態に特徴があり、遺物も若干出土しているものがある。調査区外に延長があるため完掘出来ず、図の作成も未了なので、以下概要のみ記す。

土壤22（PL. 12-7）：14L 25区に位置する。長辺1.4m以上、短辺1.3m、の長方形を呈する。深さ45cm。土壤41に近い形状を示すと思われる。出土遺物は青磁碗片がある。

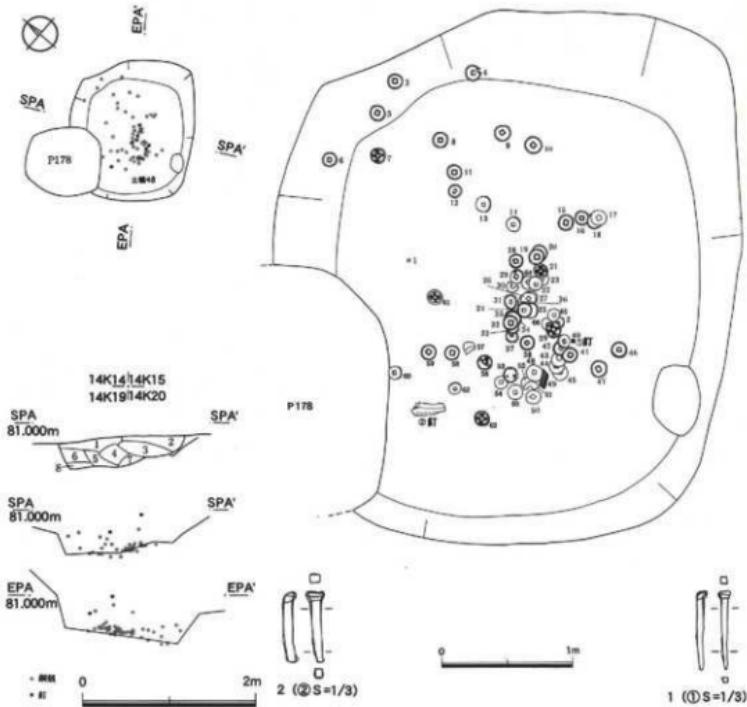
土壤46（PL. 12-1-4）：14J 7区に位置する。長辺3.6m以上、短辺1.0mの長い土壌である。深さは50cm。南西部分で溝23を切り、P452に切られる。溝23より新しく、想定される建物跡より古いと考えられる。

出土遺物は、瀬戸美濃灰釉端反皿（同4）、白磁端反皿、染付端反皿、越前擂鉢、刀子（第32図2・PL. 15-3）などがある。

サンプリングした覆土中より、米などの炭化種子、魚骨片、不明溶解物などを検出した。



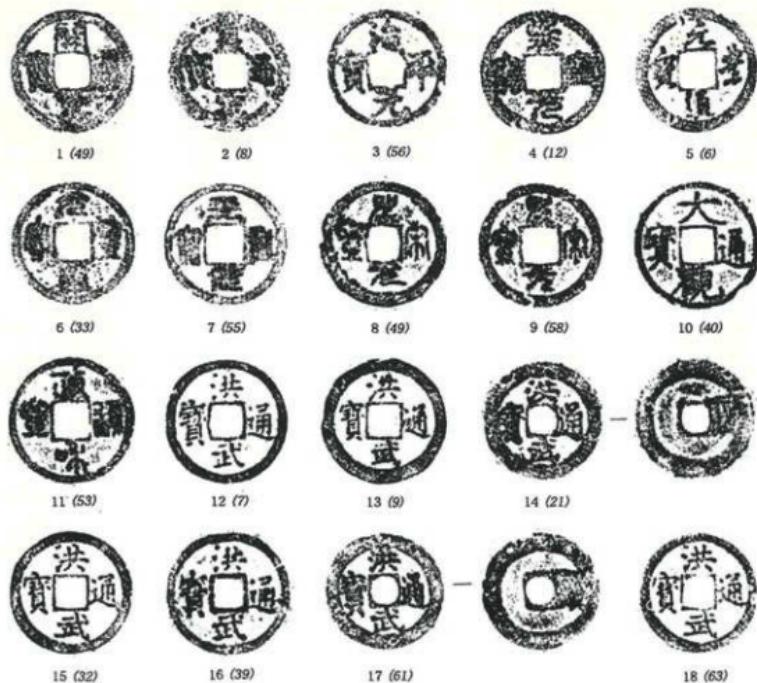
第19図 土壌48と雑辺地区銭の出土状況



第20図 土壌48平面図他

表11 土壌48土層観察表

17.5YR 3/2 37.5YR 3/3 37.5YR 3/3 47.5YR 4/2 57.5YR 3/4 67.5YR 3/3 710YR 3/2 810YR 3/4	暗褐色土主体 暗褐色土主体 暗褐色土主体 褐色土主体 暗褐色土主体 暗褐色土主体 暗褐色土主体 暗褐色土主体	高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多 高樹林中や多	中やソフト 中やソフト 中やソフト ソフト ややソフト ソフト ソフト ややソフト	C C C C C C C C	骨片 骨片 骨片 骨片 骨片 骨片 骨片 骨片	粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多 粘土粒中や多
	小畠 ロームブロック壁面	小畠 ロームブロック壁面				



第21図 土壤48出土銅錢拓影

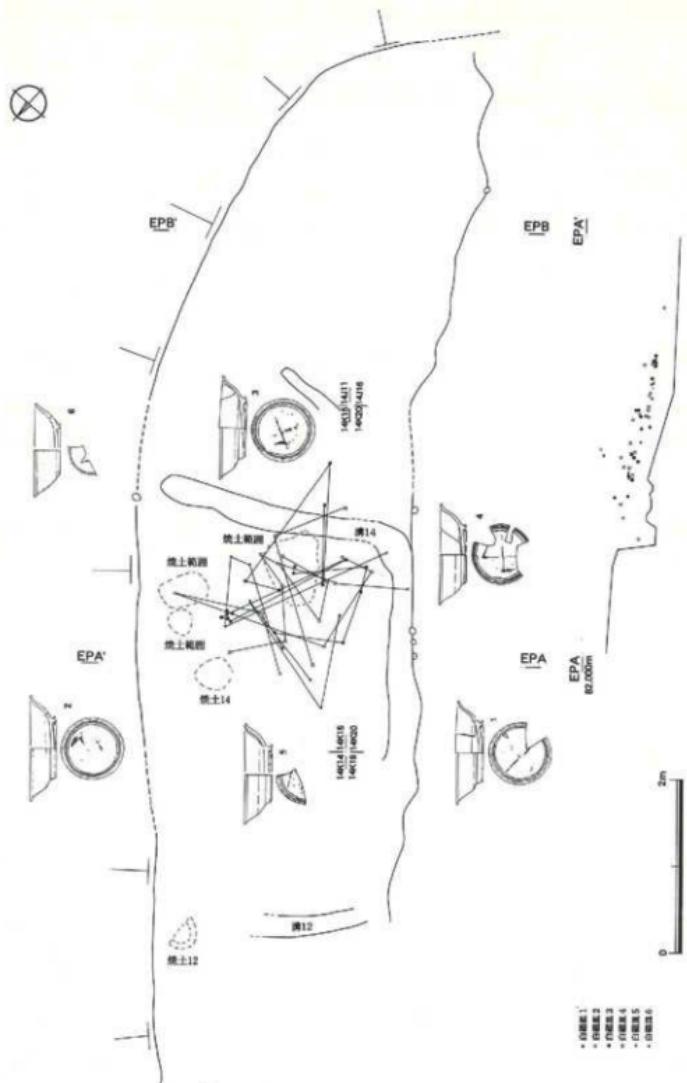
原寸・()内は出土状況微細  
図並びに一覧表番号に対応

表12 土壤48出土銭一覧表

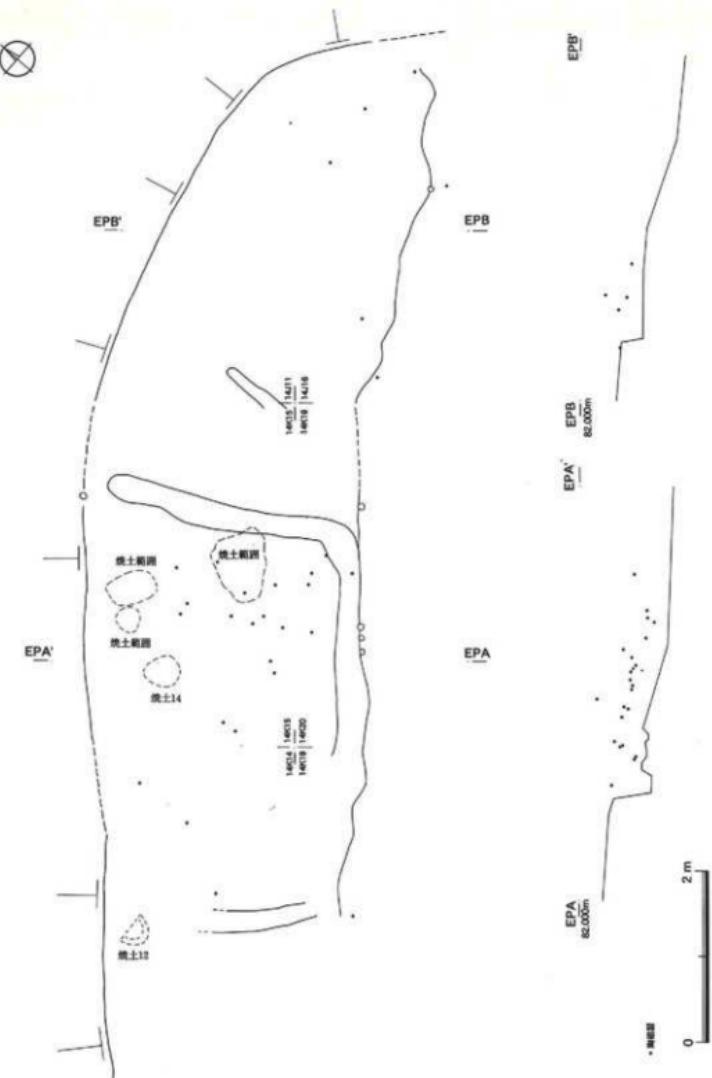
No.	銭貨名	備考	No.	銭貨名	備考	No.	銭貨名	備考
1	皇宋通寶		24	皇宋通寶		49	皇宋通寶	
2	開元通寶		25	開元通寶		50	開元通寶	
3	元豐通寶		26	開元通寶		51	開元通寶	
4	天祐通寶		27	開元通寶		52	開元通寶	
5	聖宋通寶		28	開元通寶		53	開元通寶	
6	元祐通寶		29	開元通寶		54	開元通寶	
7	開武通寶		30	天祐元寶	天祐元寶小	55	開元通寶	
8	聖宋通寶		31	開元通寶		56	開元通寶	
9	洪武通寶		32	開武通寶		57	開元通寶	
10	開元通寶		33	元豐通寶		58	開和通寶	
11	開元通寶		34	元祐通寶		59	開和通寶	
12	開元通寶		35	淳化元寶		60	元豐通寶	
13	開元通寶		36	開武通寶		61	治平元寶	
14	開元通寶		37	開元通寶		62	開元通寶	
15	天祐通寶		38	嘉祐通寶小	嘉祐通寶小	63	開元通寶	
16	開元通寶		39	開武通寶		64	開元通寶	
17	永祐通寶		40	大觀通寶		65	開元通寶	
18	開元通寶		41	開元通寶	開元通寶小	66	開元通寶	
19	開元通寶		42	開武通寶		67	開元通寶	
20	開元通寶		43	開元通寶	開元通寶小	68	開元通寶	
21	開元通寶	背有「一錢」	44	開元通寶		69	開元通寶	
22	開元通寶		45	開元通寶		70	開元通寶	
23	開元通寶		46	開元通寶		71	開元通寶	
			47	開元通寶	開元通寶小	72	開元通寶	
			48	開元通寶	開元通寶小	73	開元通寶	

表13 土壤48出土銭集計表

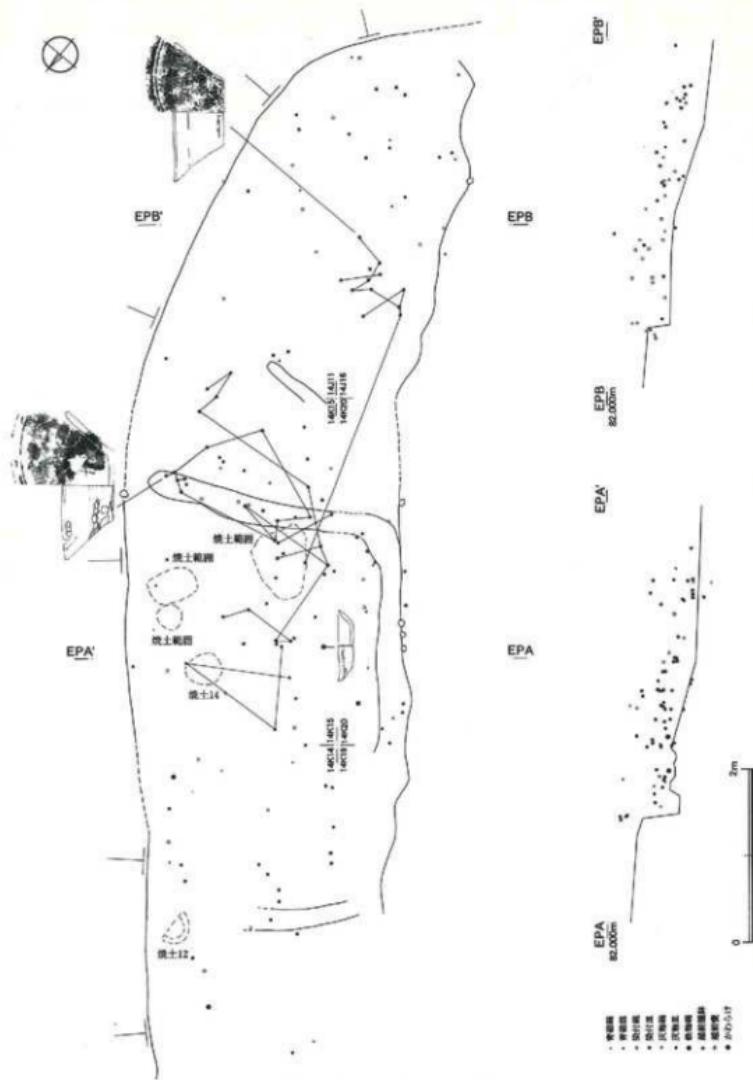
銭貨名	固名	初期年	後期年
開元通寶	唐	621	14
淳化元寶	北宋	990	1
大觀元寶	北宋	1023	2
聖宋通寶	北宋	1035	5
治平元寶	北宋	1064	1
熙寧元寶	北宋	1068	1
元祐通寶	北宋	1078	4
元祐通寶	北宋	1086	1
聖宋通寶	北宋	1101	2
熙寧通寶	北宋	1107	1
紹和通寶	北宋	1111	2
崇寧通寶	北宋	1105	10
政和通寶	朝	1106	1
大观通寶	朝	1108	1
判銭不粘		29	
計		74	



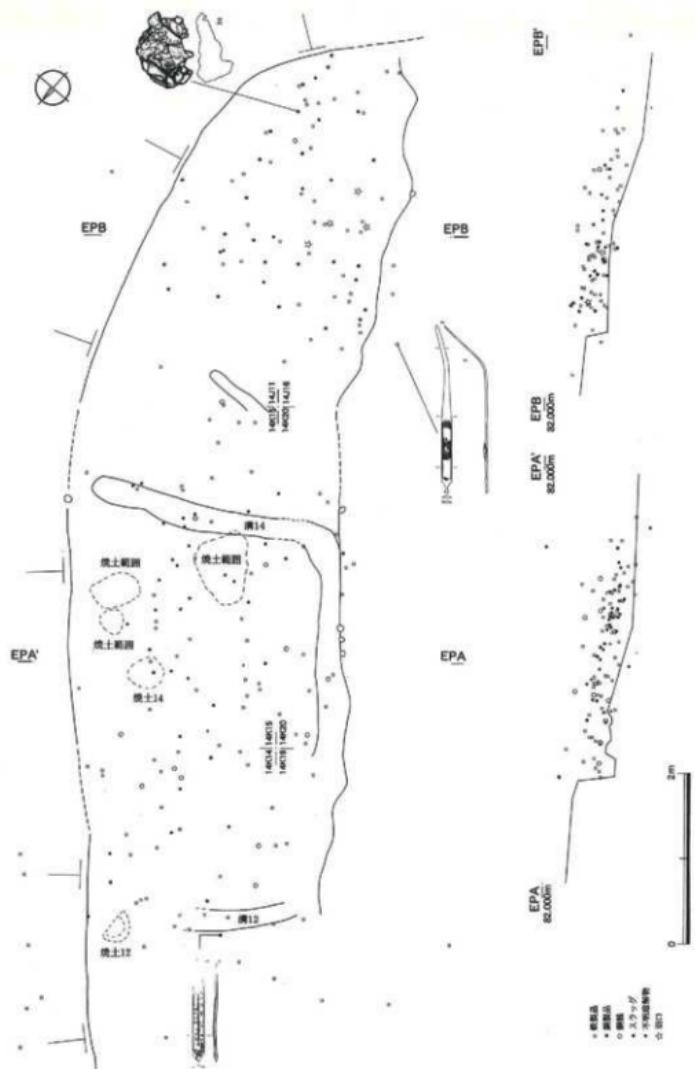
第22図 遺物分布図1（印のある白磁皿）



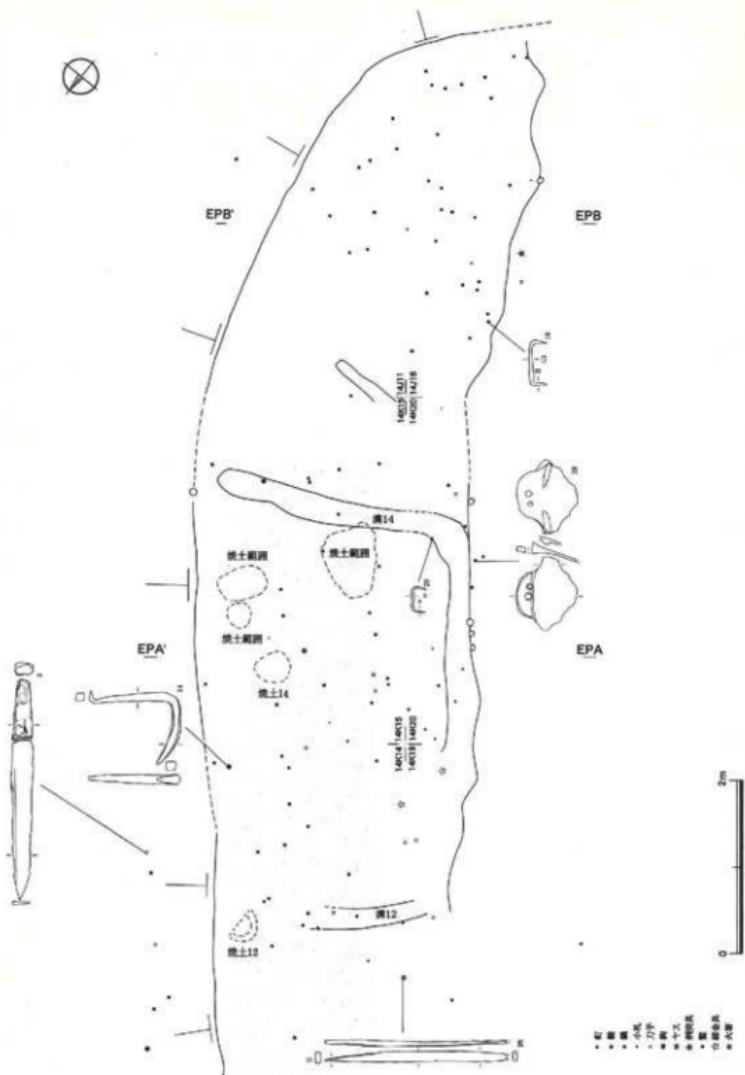
第23図 遺物分布図2 (白磁)



第24図 遺物分布図3(開磁器)



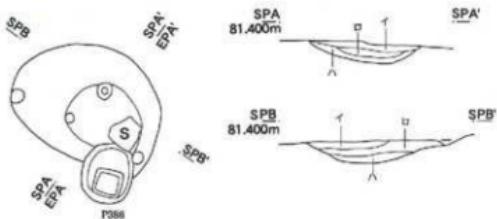
第25図 遺物分布図4（鍛冶・金属製品）



第26図 遺物分布図5(鉄製品・種別)

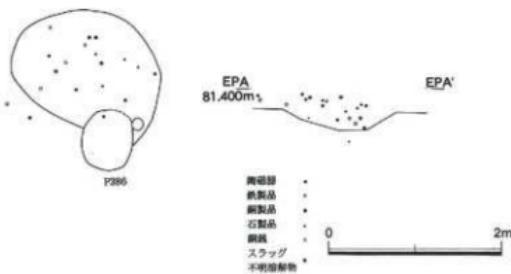


14K15 | 14J11  
14K20 | 14J16

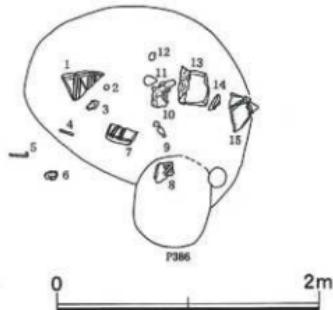


イ 10YR2/2 黒褐色土上主体 ローム粒少量 皮化物や多量 骨片微量 不明溶解物少量 ソフト  
口 10YR2/3 黒褐色土上主体 ローム粒少量 基盤粒少量 淬化物微量 骨片微量 ソフト  
△ 10YR3/3 細褐色土上主体 ローム粒 ローム粒や多量 小礁 淬化物少量 ソフト

14K15 | 14J11  
14K20 | 14J16

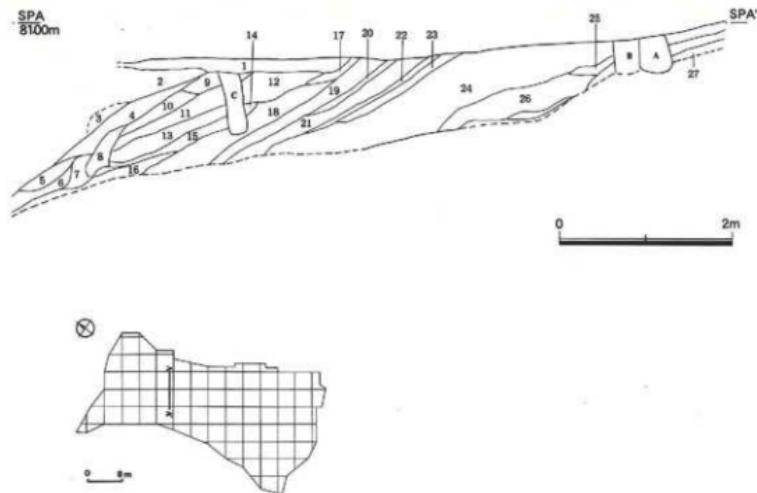


14K15 | 14J11  
14K20 | 14J16



- 1・7・8・15 陶器器（縦前指輪）
- 2 鋼鉄
- 3・6・12 不明溶解物
- 4・5 鋼製品
- 9・11・13・14 石製品（羽口）
- 10 スラップ

第28図 羽口出土状況図他



第29図 盛土堆積図

表14 盛土層観察表

1) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	ロームブロック ローム地	高密度・硬	ややソフト	C層
2) T.Y.R 3/3	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
3) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
4) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
5) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
6) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
7) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
8) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
9) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
10) T.Y.R 3/3	高密度層	O-ム地	高密度・硬	ややハード	施工初期
11) T.Y.R 3/3	高密度層	O-ム地	高密度・硬	ソフト	Cやや多い
12) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C少
13) T.Y.R 3/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C少
14) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C少
15) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C少
16) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C少
17) T.Y.R 4/4	高密度層	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
18) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
19) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ややハード	施工初期
20) T.Y.R 4/4	褐色土・高密度層	O-ム地	高密度・硬	ややハード	C層
21) T.Y.R 3/3	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
22) T.Y.R 4/4	褐色土・空隙	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
23) T.Y.R 4/4	高密度層	O-ム地	高密度・硬	ソフト	C層
24) T.Y.R 4/4	褐色土・高密度層	O-ム地	高密度・硬	ややF.	C層
25) T.Y.R 4/4	褐色土・高密度層	O-ム地	高密度・硬	ややF.	C層
26)					
27)					

(6) 通路跡（第4図・PL. 6・7）：14丁8区～15丁12区にかけて東西に位置し、調査区外、北東方向に延長があると想定される。区画溝でもある溝16・20を側溝とし、溝端部を含め道幅約4mと想定する。東側に寄って道幅約5.6mの幕末期の通路（本書附図青刷部分）があり、この側溝により遺構の一部は攪乱を受けている。路面の全体が基盤礫・粒混じりの土によって整地がされている。路面を切っている幕末の側溝の壁を観察したところ、路面の下層には14丁7区付近では焼土ブロックが見られる。通路設置以前の遺構の一部の可能性も高いが、炭化物などが混じるので、整地土として投げ込まれたものと考えられる。一部礫で擁壁されている（PL. 6-1・2）。北西側も同様に礫で擁壁していたようであるが、残存状況が悪く一部しか検出できなかつた。溝16・20の南西側延長の段縁にも溝があった可能性が高いが、後世もこの周辺が通路であったことや、植樹された桜などの根により一帯が攪乱を受けていたため検出できなかつた。溝底面には小柱穴が列状に並ぶ。第二・三平坦面に続く中央通路の延長を考えられる。

#### （7）地割

南北部地区の中央通路に面する南部で一つ、北部地区で三つ、溝や段で区画される地割を検出した。北部地区で検出した地割は、その大半が調査区外に広がる可能性があり、全容は不明である。未調査区の第一平坦面の様相を知るためにも重要であり、以下所在遺構や想定できる遺構の概要を記す。中央通路跡を挟んで北部地区南側にも、2つの地割が想定できるが、前者よりも調査面積も狭く確認できた遺構も少ないので今回は割愛する。

#### 14K15区周辺地割（第19・22～27図・PL. 16）

調査区中央14K15区周辺で溝12・14・17と段に画される地割を検出した。空塹Bに北に隣接する平坦面南北部地区は溝や段による地割を作らない大きな平坦面（曲輪）であり、その中にあって北東部を画するこの地割は異質な存在である。地割内には柱列（P186・185・390・P379・384・387・388、P382・386・389）を検出した。一案では、この段と溝は古い地割りの残骸で、柱列はそれに伴う掘立柱建物跡のものとも考えた。しかし、段の下にある北部地区14丁6区周辺地割では遺構

の重複が多く、館成立時から存在していたと思われる、南北部地区の地割がある時期まで、この部分に張り出していたとは思えない。従って、前述の柱列は建物跡ではなく、堀と考えた方が良さそうである。

又、この地割からは大量の遺物が出土し、中にはこの地割の性格を示唆すると思われる遺物もある。以下、遺物の種毎に概略を記す。

#### 高台に印のある白磁皿について（第22・27図・PL. 3・17）

高台に印のある白磁皿が7個体出土した。年代は16世紀全般を通して見られるもので、福井県朝倉氏一乗谷遺跡や青森県浪岡城跡など、各地の戦国期遺跡でもよく見られるものである。勝山館跡でも、瀬戸美濃灰釉端反皿と並んでよく見られる遺物である。内6個体は端反皿で、1点は底部片のみで、器形は不明である。1～4は印は縦あるいは鉛を交差させたような形であり、5・6の2点も同じ印を記していると考えられる。7はこの地割外の遺物であるが、同類のものとして掲げた。小さい破片なので、印の形態は推測出来ない。肉眼・ルーペによる観察の結果、釉薬の上に書かれたものであることを確認した。線と平行な非常に細かな引っ搔き傷が認められるので、堅いもので引っ搔き、擦り込むように書かれたと推測される。顔料の特定などは、化学的な分析を待たなくてはならない。1～4は、いずれも最初に×印に交わる点から書き始めているようである。この印がある白磁皿についての現段階での位置付けは後述をした。

出土分布状況は14K15区に集中して見られる。更に細かく見ると、溝14を越える破片は僅かである。このことから、これらの白磁皿はセット関係にあることが想定される。しかし、垂直分布を見ても分かるように、地割の底面よりもかなり高いところから出土しており、溝が廃絶している可能性もある。あるいは溝との直接の関係は見いだせないのかもしれない。

#### その他の陶磁器について（第23・24図）

青磁蓮弁文直口縁碗、青磁波花皿、白磁端反皿（上記の印のあるものとは別個体と想定できる）、染付端反碗、染付蓮子碗、染付玉取獅子文端反皿、瀬戸美濃灰釉端反皿、瀬戸美濃灰釉丸碗、てづくね成形の「かわらけ」、越前焼鉢（第31図2・3）

などが出土している。第31図2は14K15区を中心にして、第31図3は14J16区（轄羽口出土ピット）を中心に出土している。上記擂鉢は全体の7割～9割程度の状態にまで復元できた。単なる遺物の流れ込みでは無く、この場所で廃棄されたことが想定できよう。しかし、すべての陶磁器片がこのように接合が出来たわけでも無いので、細片の中には流れ込み遺物も当然存在すると思われる。出土陶磁器の推定年代を見ると、15世紀後半から16世紀前半までのものに収まる。

#### 鍛冶関連遺物と金属製品について（第25図）

スラッグと不明溶解物と仮に呼んでいるものが轄まつて出土した。両者が混在している部分もあり明瞭な線引きは出来ないが、スラッグは14J11・16区に、不明溶解物は14K15区に集中する傾向にある様に思える。14J16区付近では轄の羽口が出土している。

鉄製品は釘、鍔、鍋、火箸、小札、刀子、錆金具、鉤、ヤス、鑿などの多種多様な製品が見られる。

銅製品は笄（第33図2）、銅鉄がある。

#### 製品種別の状況（第26図）

釘、鍔、鍋は全体的に散らばって出土している。刀子、小札は14K20区にやや多く見られる箇所がある。刀子は溝14に画される地域に分布する。錆金具も溝14に画される場に分布するが、大きな特徴とは出来ない。

#### 轄羽口とピット（第28図、PL. 16-3～6）

14J16区で轄の羽口片（第32図36）が出土した。周囲は黒色土が堆積しており、四分割して堆積状況を確認しながら掘り下げたところ（PL. 16-5・6）、平面形が長軸90cm、短軸65cmの梢円形で、底面が喉なる指鉢状のピットになった。土壤と呼べる程大きくもない。サンプリングした覆土からは、不明溶解物や焼けた粘土塊、魚骨片、炭化種子を検出している。轄の側からは、前述の越前擂鉢（第31図3）が出土した。口唇部断面形態はやや鋭角を有し、16世紀前半に位置付けられるものである。分布図に石製品としてあるものは全て轄羽口の破片である。他に刀子、釘、銅鉄、などが出土している。

#### 地割と遺物との関係について

この狭い地割の性格を示唆するものとして、鍛冶関連遺物がまず挙げられよう。スラッグや不明

溶解物の集中出土は、この場が鍛冶作業場の一部であったこと想起させる。特に両者の集中傾向は若干異なる様相を示し、何らかの要因によるものと考えられる。しかし、炉などの遺構は検出できず、出土した轄羽口も破損して廃棄されたものと考えられるので、単なる廃棄場所でしかないのかもしれない。そうなると前述の両者の集中箇所の違いも分別した廃棄の結果とも推測できる。

遺物の垂直分布状況を見ると、いずれも床面よりは上の覆土中位辺りに集中して出土する。ただ鉄製品や一部の越前擂鉢、染付皿、瀬戸美濃灰釉皿は幾分床面に近い所で出土しているように思える。このことから陶磁器の多くは地割が埋設する段階の遺物と考えられそうであるが、鉄製品や陶磁器の一部には地割が埋設する以前のものもあると思われる。しかし、垂直分布図を見て分かるように、それが遺構面が2面あるということを強く示す様な分布とはならないようである。この地割の堆積土は黒色・黒褐色土であり、周辺の盛土層のような基盤礫を多量に含む土ではない。人工の盛土では無く、腐植土の自然堆積層かもしれない。以上のことから、分布の傾向の僅かな違いは、埋設の段階での違いから生じた程度なのかもしれない。

#### 他の遺構との関係

一部重複する第4号建物跡との前後関係が、現場段階では判然としなかったため強い断定は出来ないが、第4号建物跡の柱穴底面レベルよりも低いところに段の底面があるので、この地割造成時に柱穴は削り取られたと考えられる。よって第4号建物跡が先行し、その後この地割が作られたと思われる。

#### 小結

この小地割の性格は現段階では、明らかにし得ないが、建物を区画する地割と全く異質なものであることは、間違いなかろう。建物を建てられない僅かな空間を遮蔽する柱列からは、特別な意味を持っていた空間であったことを想定させる。又、多種多様な遺物の集中は、この場での意図的な廃棄を反映したものと考えられる。特に印の記された白磁皿の一括出土は、この場の性格を示す遺物として再考が必要である。

13L25区周辺地割（PL.8）：調査区北西部  
13L24・25・14L4・5・14K1区周辺に位置す

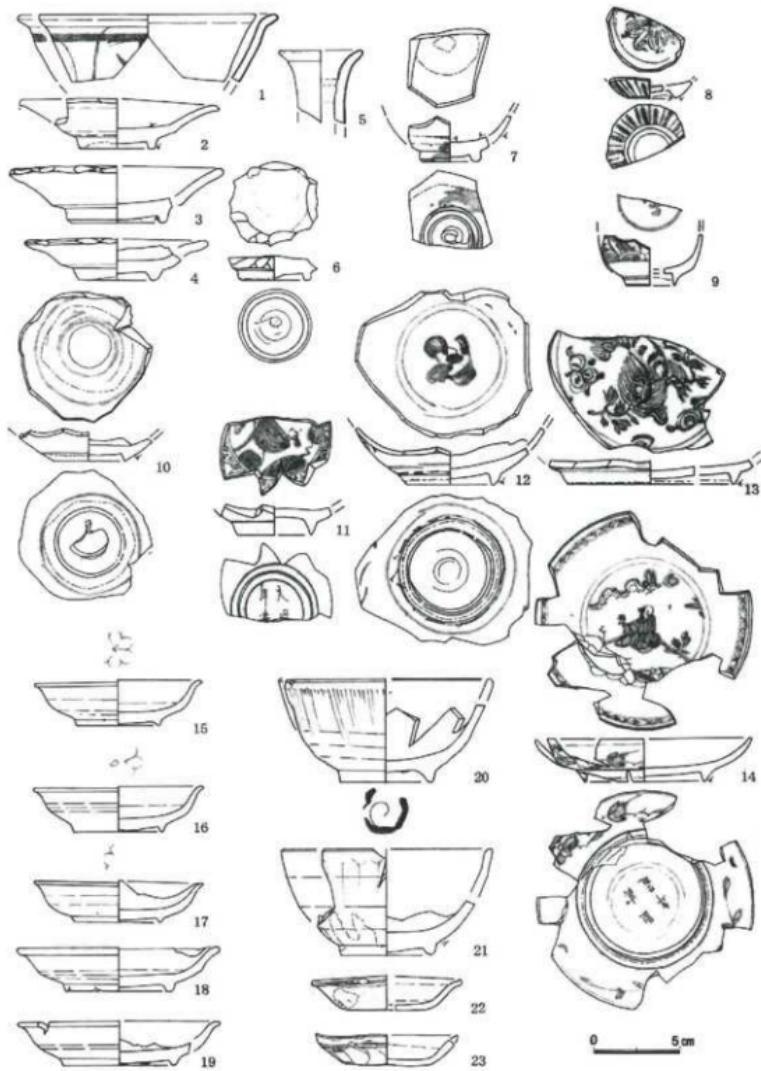
る。段と溝4（他に溝8・10によって画される時期を想定できる）によって画される。遺構は第94・95号竪穴建物跡、土壙22・23、溝3・7がある。焼土、炭化物の集中ブロックがある。調査区境界13L24付近をトレンチ調査した結果、寺ノ沢に面する縁辺部は、最大1m程の盛土による造成がなされていることを確認した。溝に伴うものと想定する炭化材を（PL.8-2~4）検出した。P539・541・547・551・567・570・575・579、P553・568・571・576・581・583、P540・545・550・566・569・573で柱列が想定できる。L字状にしか並ばず、P573他やP579他の柱列は純角に開くので、建物の柱列ではなく崩と考えられる。また、段の壁面に水平方向のピットを検出した。上記の場の可能性を指摘した柱に伴うものかもしれない。

溝と段の斜面から珠洲擂鉢（第31図5）が出土した。他に瀬戸美濃灰釉端反皿なども出土している（PL.8-6）。また骨角器は14K1区で13点出土している（第33図13-16）。

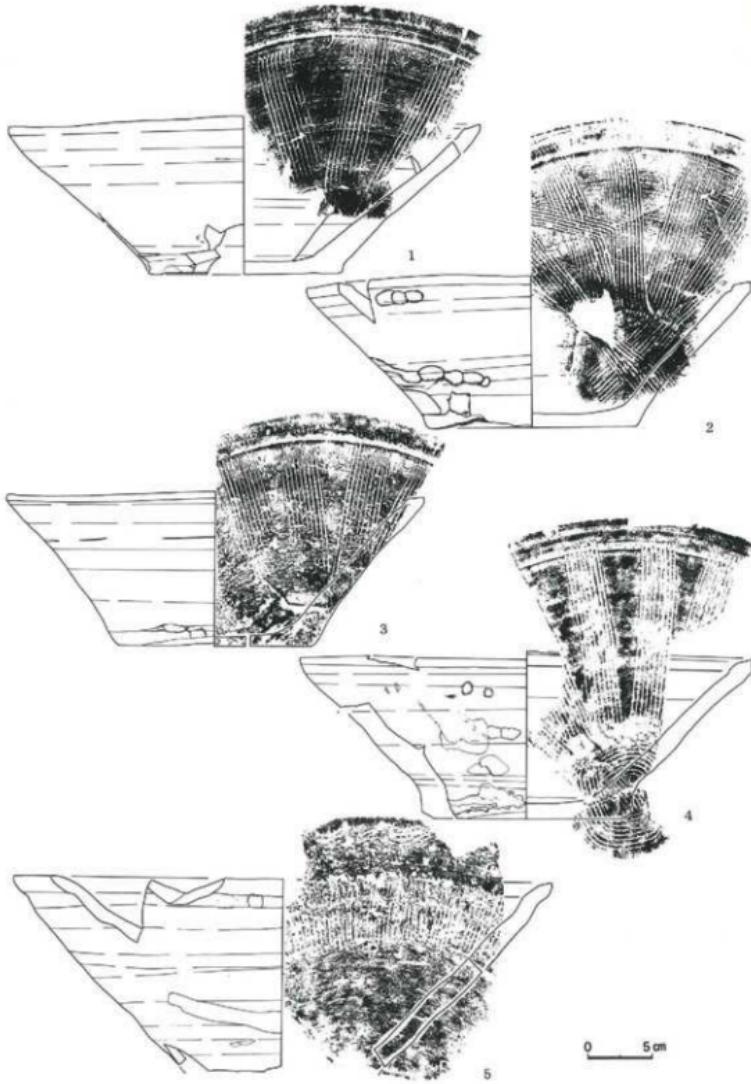
14K2区周辺地割（PL.9-1・2）：調査区北部14K2・7区周辺に位置する。段と溝6によって画される。遺構は土壙34・40がある。北東方向14K2区周辺は、自然地形では北西方向に下

がる緩やかな傾斜となっており、その部分を平らにするためと思われる基盤礫混じりの盛土を確認した。P494・500・511・516・529、P493・498・510・515、P517・519・506・512・526、で柱列が想定される。P517の柱列は、矩形になりそうなので、建物跡として想定できるのかもしれない。

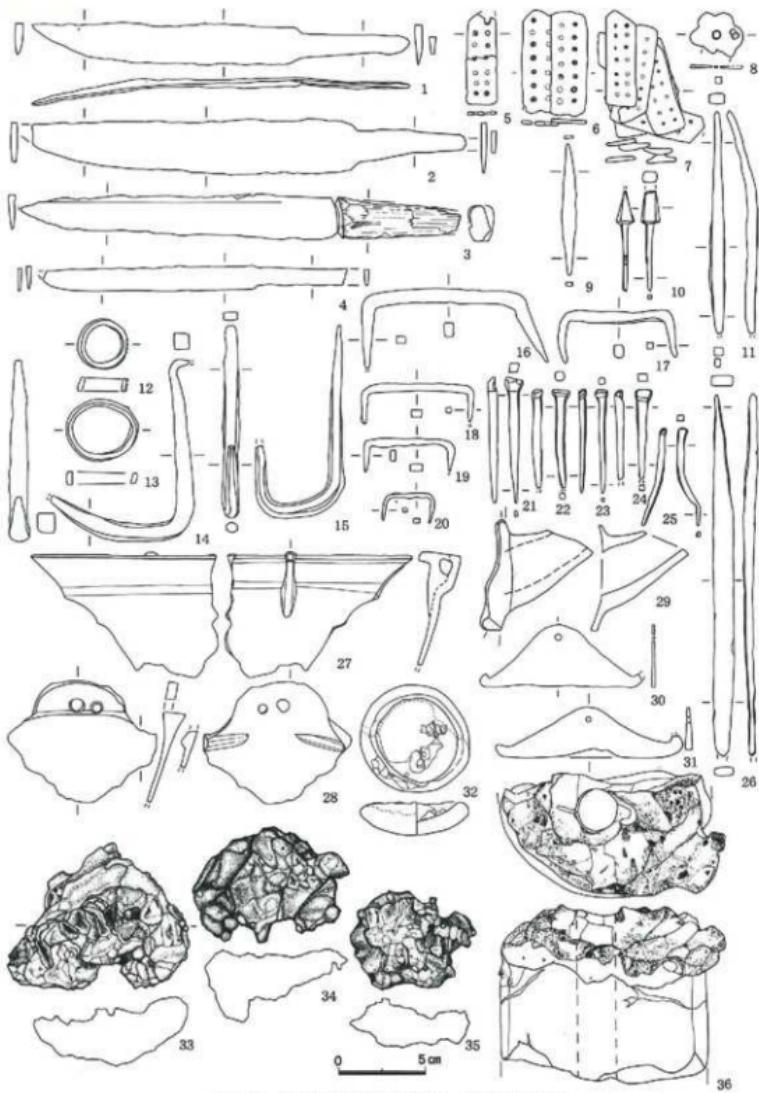
14J6区周辺地割（PL.9-3）：調査区北東部14K9・10・14J6・7区周辺に位置する。中央通路の側溝を兼ねる区画溝16に画される。遺構は、溝19・23、掘立柱建物跡5棟、第98号竪穴建物跡、土壙41・46、焼土16などがある。柱穴は方50cm前後と大きいものもあり、第二平坦面に見られる間仕切りを持つ中規模クラスの建物跡（例平成9年度調査第9号建物跡）の柱穴に匹敵する。P467・462・430・440・444・448で三間×二間以上、P465・461・432・443・447で二間×二間以上、P399・404・411・421・427・469で桁行四間以上×梁間二間以上、P398・407・415・425・429・438・456で桁行五間以上、P402・410・417・423・428・436・457・464で桁行五間以上×梁間二間以上の計5棟の建物跡が想定でき、同時に併存の可能性のものを除くと4回の建て替えが想定される。



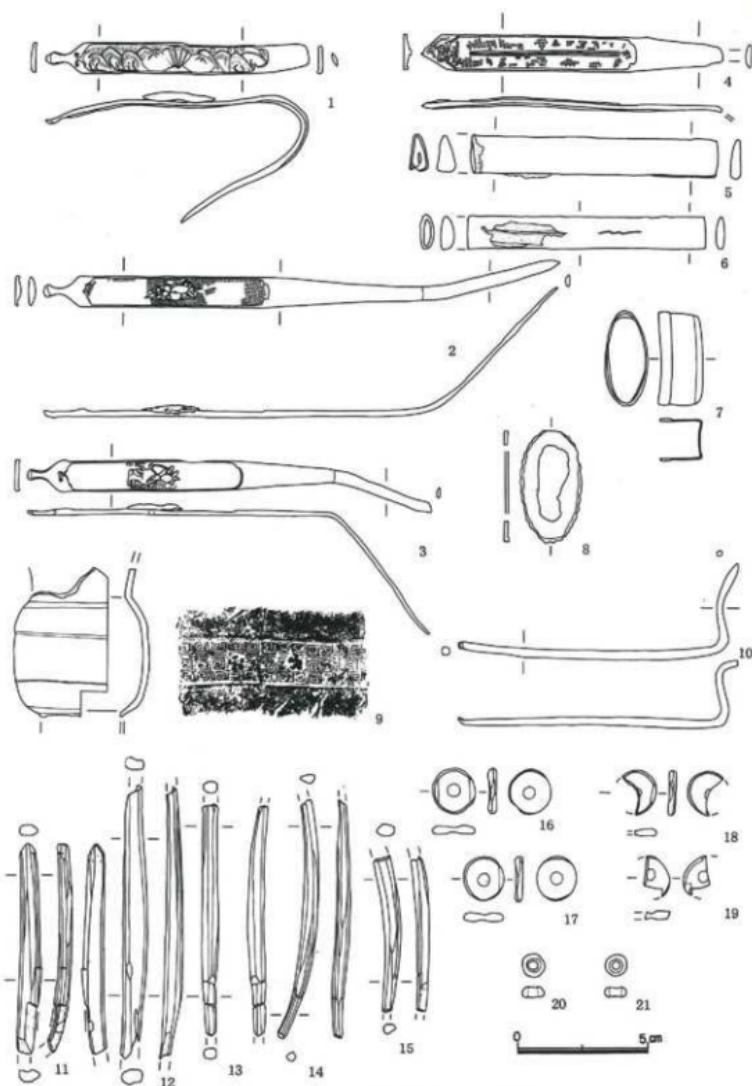
第30図 調査区出土遺物（陶磁器）



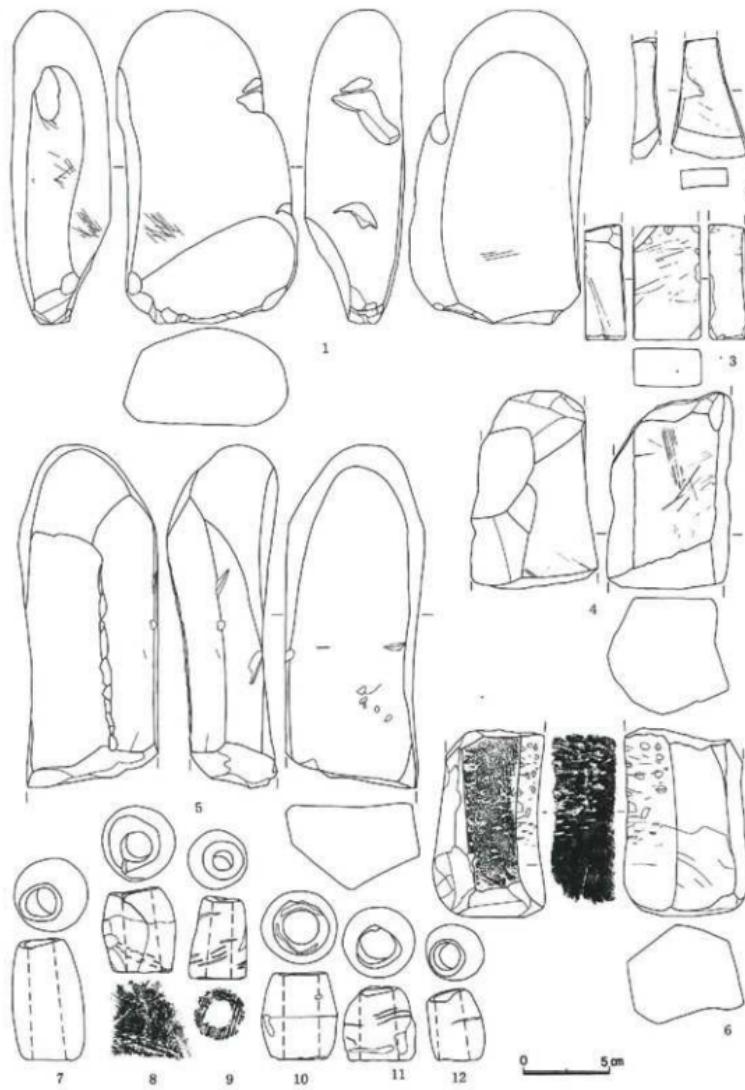
第31図 調査区出土遺物（越前・珠洲指鉢）



第32図 調査区出土遺物（鉄製品・鍛冶関連遺物）



第33図 調査区出土遺物（銅製品・骨角器）



第34図 調査区出土遺物（石製品・土製品）

## (8) 出土遺物の概要

陶磁器・金属製品・土製品・石製品・骨角器他、計4,581点出土した。他に繩文土器・石器、擦文土器、土器が出土した。以下、第27・30~34図、PL. 3・4・17~20で示した遺物を中心とし、全体的な様相を記す。尚、実測図掲載遺物の個々の特徴、法量については遺物観察表(表15~17)を参照されたい。

### a 陶磁器 (第27・30・31図・PL. 17~19)

勝山館期のものは、破片数で2,692点出土した。破片点数で見ると、国産陶器が1,423点、52.9%、舶載品1,269点、47.1%で国産品が上回っているが、供膳具のみの見ると舶載品が6割以上を占める。また、碗の比率が高いように思われる。ここ数年の第二平坦面の調査では、碗は皿との合計数の25%前後であることが多かったが、今回の調査では、32%でやや多い傾向にある。この中では特に灰釉陶の点数が多い。ここ数年の第二平坦面の調査では、平成六年度の(152点)を除き、70点前後の出土であったが、2倍余りの146点の破片が出土している。調理具、貯蔵具は殆どが越前である。

青磁(第30図1~6)225点出土した。端反碗、無文直口縁碗、刺先蓮弁文・蓮弁文直口縁碗、稜花皿、瓶の頸部などがある。

1は器表面に幅の広い蓮弁がある端反碗である。上田編年では15世紀段階に位置付けられ勝山館跡出土青磁の中では、年代的に古いグループに属する。稜花皿は内壳と施釉してあるものの二種がある。底径(高台径)4cmのものが多いが、5cmのものもある。6は内壳の皿を打ちついで、高台部を円盤状に加工したものである。過年度の調査でも同様のものが出土している。

白磁(第27図1~7・第30図7)473点出土した。切高台皿、底部から大きく外反する皿、小杯などがあるが、端反皿が大部分を占める。

前述の通り端反白磁皿には印が記されたものがある。

染付(第30図8~14・PL. 15)552点出土した。端反碗、直口縁碗、蓮子碗、糸底反皿、糸底丸皿、甚筒底皿、甚筒底小皿、小杯がある。

10は内壳の甚筒底皿。漳州窯系のものと考えられる。13の獅子皿は底径9.7cmで勝山館跡で比較的多く出土する口径12.0cm、底径6.2cmの獅子皿

よりもはるかに大きい。過年度調査で、これとは同じ大きさと思われる獅子皿が、もう一個体出土している。

赤絵 瓢・小杯13点出土した。いずれも小片であり、大きさは不明である。

### 朝鮮 白磁碗、小碗片など6点出土した。

瀬戸・美濃(第30図15~21・PL. 18~2・19~1)灰釉664点、鉄釉87点の計751点出土した。灰釉は連弁印花文丸碗、柳目状印花文丸碗、端反皿、稜花皿、丸皿、菊削皿がある。鉄釉は輪高台・内反高台の碗、稜皿、茶入がある。いずれも大室期のものである。他に窑窓期の鉢、腰折皿がある。また位置付けがはっきりしないが、大室I期相当と推定される内壳(あるいは縁釉とすべきか)の大皿などがある。

灰釉皿の口縁部残存破片で見ると端反皿が殆どであり、大部分が大室I期(五期区分)に位置付けられるものと考えられる。

端反皿は口径8.4cm、9.4cm、11.4cmなどのバリエーションがあり、細分化が出来るので、今後検討が必要である。また端反皿の中には、漆籠ぎの痕跡が認められるものもあった。

稜花皿は少なくとも三個体ある。器形としては、端反皿の一類であるが、端部をつまんで波打つ形状を作り出している。

大皿(PL. 4~1・19~1~6~9)としたものは、口径19cm、底径9cm前後と推定する。口縁部は反る。平成9年度の調査でもほぼ同じ大きさの1個体が出土し(概報Ⅳ P73、第53図7)、他にも同じ大きさと思われるものの破片が数点出土している(参考としてPL. 4~1に一部を載せた)。勝山館出土品の灰釉皿では非常に少ないものである。

15・16は端反皿で、焼土17(PL. 2~4)からの出土品であり、いずれも被熱している。18は端反皿で高台に焼成後付けられた溝が3カ所ある。各々の溝に対応する溝や、擦り傷は認められない。複数個を括るためにつけられたものでは無いようであり、目的は不明である。21の刺先蓮弁文丸碗は釉が垂れた様なかかりかたをしている。内側底には細かな擦り傷があり、茶筅すれと考えられる。

志野 出土数は9点と非常に少ない。

唐津 出土数は2点と非常に少ない。いずれも

皿片である。

越中瀬戸 鉄釉碗片が1点出土している。

珠洲（第31図5、PL. 8-6）擂鉢片が4点出土した。底部は欠失しているが、全体のほぼ半分を残存する擂鉢1個体が出土している。口唇部の波紋・御目は、かなり摩耗して薄くなっている。口唇部が緩やかに立ち上がる特徴から、吉岡編年のⅧ期（1570年代）に相当すると思われる。

越前（第31図1-4）擂鉢、甕片628点が出土。擂鉢は、口唇部丸味を帯びるもののと断面形が脱角をなすものがあるが、後者が多い。脱角をなすものには、口端部が水平になり、内傾して三角内面口唇部に段を明瞭に作るもの、浅い溝状になるもの、削ぎが弱いものなどがある。他に御目を密に施す16世紀後半に位置付けられるものもある。

壺・壺類は接合があり出来ず、全体の形状を窺える資料は少ないが、口径7cmを計る壺、口縁部の肥厚から16世紀前半に位置付けられそうな甕などがある。甕の表面は施釉、無釉両者ある。

かわらけ（第30図22・23・PL. 18-3-4）22点出土した。特徴から少なくとも2個体あると想定できた。いずれも口径8.5cm前後のものではほぼ同じ大きさと考えられる。てづくね成形によるもので、内面は横方向のナデ整形が認められる。製作技法から京都系土師器皿と考えられる。

信楽 壺ないしは甕と思われる破片が5点出土した。大きな破片ではないため法量は不明である。

土製品（第34図7-12）陶錘、瓦片、計20点出土した。

土錘（7-12）15点出土し、少なくとも13個体を想定できる。いずれも中心部に孔がある管状のものである。算盤玉状あるいは長楕円形に成形している。8点は破片であるが6点は長軸が計測可能であり、大きく2グループに分かれる。4cm前後の小型、7cm前後の大型となる。胎土は礫粒を多量に含むものと、礫粒はあまり無く、赤い鉄物が斑点状に見えるものの二種がある。

#### b 金属製品（第32・33図、PL. 2-4）

鉄製品（第32図1-31、PL. 19-3-4、20-1）394点出土した。鐵、小札などの武具、刀子などの利器、各種大きさのある釘・鏡、内耳・吊耳鉄鍋などの煮炊具、その他苧引金、火箸、火打金などがある。

8は花弁の様な形をした板状の製品である。中

央に径5mmほどの穴がある。製品の名称・部位は不明である。27は内耳鍋で、口縁部2センチの所に段を有する。29は瓶などの注口と考えられる。26の刺突具としたものは、尖った方を基部とすべきかもしれない。

銅製品（第33図1-10・PL. 19-2）62点出土した。

武具（1-8）小柄、笄、鉤、鎗、柄頭、茱萸など23点出土した。

3は2羽の兎をモチーフにした飾りを装着している。飾りが付く部分は魚々子地になっている。1-3はいずれも大きく折れ曲がっている。4は蘿手文を陽刻で表現している。飾りが付く部分は魚々子地に一字文字状の陽刻のみで、別作りの飾りが付かない。前三者は蘿手文は印刻（2は蘿手文が確認できなかった）、別作りの飾り鉢を装着するなどの類似点があるが、4は技巧的に異質な印象を受ける。また幅も若干広い。5・6の小柄は紫文である。

吊手金具（PL. 19-2-10）は甲冑の部品の可能性もある。

仏具（9）9は花瓶の胴部と考えられる。中央に上下3列の雷文を施した文様帶があり、その上には5つの花弁がある花が浮き彫りになっている。石川県穴水町白山橋遺跡34号配石で出土した花瓶と意匠、胴部径ともほぼ一致し、同型のものと推測する。平成6年度の調査では、飲食器の高台（概報XVI P56、35-4）としたものがあるが、これも同型の花瓶の高台と考えられる。

他に亜字形花瓶の台部分と思われる破片（PL. 2-12）、鉢、金剛盤か香炉（同13）の脚がある。

その他（10）10は簪と考えられる棒状の製品である。一端は錐状に作られ、もう一方は折り曲げた範囲に作られている。和鏡破片が3点出土した（PL. 19-2-14-16）。14・15は同一個体と見られるものである。推定径7.6cm、厚さ1.8mm。鏡背面に蘿の様なものが厚い錆と絡みついてしまつて意匠の詳細はわからないが、二重の圓線を確認できる。16は二重の圓線と松の文様を確認した。あるいは上記2点と同一個体なのかもしれない。

銅鏡（表19）無文鏡を含む20種243枚出土した。内74枚は前述の土壤48から出土したものである。他に寛永通宝が4枚出土している。

判読可能なものの内、最古銭は開元通寶（初鑄年、621年）で17枚、最新銭は洪武通寶（初鑄年、1368年）で16枚出土した。北宋銭が15種45枚あり判読可能なものの38.8%を占め、明銭は2種23枚で19.8%を占める。背面に「一銭」と記された洪武通寶が3枚出土している。14K 7区で「無文銭」が27枚重なって出土している。径が19mm前後と小さい上に非常に薄い。14K 8区では、六枚の銭に、薺のようなものが通された状態で出土している。

銘や擦れにより判読不能としたものの中には無文銭と分類してもよいのかかもしれないもののなどが含まれていると思われる。また、判読可能の中には、模鉄銭が含まれている可能性も捨てきれず、問題点や課題が残る。

c 錫冶関連遺物（第32図32～36・PL. 20-2～4）368点出土した。石製・土製櫛の羽口、坩埚片（PL. 20-3・4）、鉄滓、不明溶解物がある。32は溝18からが出土した坩埚（とりべ？）である（PL. 14-9）。鉄滓（33-35）は14K 15・20・14 J 11・16地区を中心に157点出土している。大小種類があるが、513gもある大きめの楕円形滓もある。また、金属加工の際に生成されたと思われる不明溶解物は、現場で点取り上げ可能な大き

きのものだけでも115点出土している。他に土壤の覆土などから鍛造剝片を検出している。

d 石製品（第34図1～6）33点出土した。砥石は淨清寺砥石と考えられるもの等31点出土している。1・2・5は肌理の細かい白色を呈するもので、軟らかめの石である。4・6は肌理が粗く硬めの石である。

他に茶白片が2点出土している。

e 骨角器（第33図11～19）45点出土した。中柄・刺突具（11～15）は39点出土した。細片が多く個体識別は難しいが、20個体以上あると考えられる。11は断面の形状から鹿の中足骨から作り出したものと考えられる。いずれも被熱している。双六脚（16～19）4個の内2個は破損しているが、径16mmのほぼ円形を呈するものと思われる。いずれも両面の中央部に径4mm程の僅かな凹みがある。いずれも被熱している。

骨角器ではないが、馬の歯、陸獣・海獣と考えられる骨、貝なども出土している。

f ガラス玉。（第33図20・21）。図示したものにサンプリング土中から、外径3.8mm、穴径1.5mm、紫色の非常に小さな玉を検出している。

表15 出土遺物観察表（陶磁器）

	法 量	物 質	物 質	特 徴	出土地点	図版番号		
青磁瓶	(150)	(39)	グレイムの黄	グレイムの黄 透印文、端反曲。裏面による縁のある部分。	14K19Ⅲ	第30図1		
青磁皿	(115)	44	29	グレイムのオ リーブグリーン 明るいグレイム の 緑	弁先に合わせた3本の巻印文。内底、墨付以下露地。	14E6 6 Ⅲ	第30図2	
青磁皿	124	52	33	グレイムのオ リーブグリーン の 緑	弁先に合わせた3本の巻印文。内底の縁を焼き取る。重ね巻縁有り。 外底部の舟状に動かす取っている。	18M11.4 Ⅰ	第30図3	
青磁皿	106	40	34	グレイムのオ リーブグリーン の 緑	弁先に合わせた3本の巻印文。内底には2本の巻印文。 14J10近世薄	14K15Ⅲ	第30図4	
青磁瓶	(46)		洗い 黄 緑	黄みの白 腹部内面口縁より1cm部分で脚が厚い。	14J7 Ⅲ	第30図5		
円盤状製品	42	14	明るいグレイ ムの 緑	明るいオリーブ ムの 緑	青磁瓶の高台部を打ち欠き仕上げられる。	I	第30図6	
白磁瓶	32		薄い 黄	薄い 黄 外表面以下露地。内底蛇の目状に脚を焼き取る。粉土脚質。	14J12Ⅱ	第30図7		
染付皿	26		黄みの白	ブラウンの白 青磁底。外面毎花弁文、内面十字花文。墨付から外底部にかけて露地。	14J9.4 Ⅱ	第30図8		
染付杯	28		黄みの白	白 外表面高台部に露地。内面露字文。墨付とその周囲 を露地。脚部露文。	14K14Ⅳ	第30図9		
染付皿	40		グレイムの黄	薄い 黄 青磁底。外表面高台部に露地。内面界線。外底、内底とも無釉。脚質。	14J9 Ⅰ	第30図10		
染付皿	43		青みの白	青みの白 外表面高台部に露地。高台内に「大明年造」。内面、三角形文内に人物。	14J25 近世薄	第30図11		
染付瓶	50		黄みの白	白 外底部に3本の界線。内底部2本の界線内にデコ技術による花卉。高台まで露地。脚部露文。	14J1上縁45 18K15 1 Ⅱ	第30図12		
染付皿	97		黄みの白	白 外表面足を跡付。高台3本の界線。内面二重露線の中玉取露子。	14J31 Ⅱ	第30図13		
染付皿	126	70	25	黄みの白	白 外表面口縁下及び高台部に露地。脚部花鳥文。底部、洪武年造。内面 露下半円印文底と二重界線内に人物。	17M1 Ⅰ	第30図14	
灰釉皿	96	48	26	グレイムの黄	薄い 黄 露反口縫。付高台全面露地。見込印文花。被熱。内面赤色。	14J15 燒土7	第30図15	
灰釉皿	97	51	26	グレイムの黄	薄い 黄 露反口縫。付高台全面露地。見込印文花。被熱。脚部以下一部に煤。	14J15 燒土7	第30図16	
灰釉皿	97	50	24	グレイムの黄	薄い 黄 露反口縫。付高台全面露地。見込印文花。被熱。	14J15 Ⅱ	第30図17	
灰釉皿	117	62	26	グレイムの黄	薄い 黄 露反口縫。付高台全面露地。	14K1 P550瓶方	第30図18	
灰釉皿	116	65	27	グレイムの黄	黄みのグレイ ムの 緑	14K11+12 窓穴6	第30図19	
灰釉皿	123	53	60	グレイムの黄	薄い 黄 露口縫。露連卉。全面露地。内底に輪だまり。	14K12 P116瓶方	第30図20	
灰釉瓶	122	54	61	グレイムの黄	薄い 黄 オレンジ レング ジ	露口縫。被先進文。施釉が窓で外側は施墨が著しい。内底に茶壳す れ縁の脚振り。	14K11.1-12 窓穴6	第30図21
かわらけ	86	45	20		焼い黄みの オレンジ ジ	づくね成形。ナジ整型。窓内外面とも煤が付着する。	14K11.1-12 窓穴6	第30図22
白磁皿	120	(64)	31	黄みの白	白 露反口縫。墨付との窓辺を焼き全面に施釉。墨付高台間に砂粒が付 着。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ 14K30 Ⅱ	第27図1	
白磁皿	121	64	30	黄みの白	黄みの白 露反口縫。墨付との窓辺を焼き全面に施釉。墨付高台間に砂粒が付 着。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ	第27図2	
白磁皿	120	64	30	黄みの白	白 露反口縫。墨付との窓辺を焼き全面に施釉。墨付高台間に砂粒が付 着。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ 14K20 Ⅰ	第27図3	
白磁皿	117	63	32	明るいオリーブ ムのグレイム	黄みのグレイ ムの 緑	露反口縫。墨付との窓辺を焼き全面に施釉。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ	第27図4
白磁皿	114	60	32	黄みのグレイム	黄みのグレイ ムの 緑	露反口縫。墨付との窓辺を焼き全面に施釉。墨付高台間に砂粒が付 着。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ	第27図5
白磁皿	108	54	29	黄みの白	黄みの白 露反口縫。墨付高台及び口縁下に砂粒が付着。高台内に印有り。	14K15 Ⅱ	第27図6	
白磁皿	25	20	3	黄みの白	黄みの白 底部小片。長さ25mm 奥20mm 厚さ3mm。	14L15 Ⅱ	第27図7	
越前振錦	362	148	114- 117	浅い赤みの グリーン の 緑	口唇断面形角舟で内削り気味1条 単位右側り。内底に3つの波がつ く。	14J15 Ⅱ	第31図1	
越前振錦	340	158	108- 115	グレイムの ブラウン の 緑	口唇断面形やや角舟1単位のみ露し日が斜に横走する。8条1単位 14K15 Ⅱ	第31図2		
越前振錦	318	146	115- 118	浅い黄みの ブラウン の 緑	口唇断面形、純角舟。8条1単位露し日右側り。見込みも右側りの円 状の露目。	14J16 窓口附近	第31図3	
越前振錦	346	152	123	黄みのブラウン の 緑	口唇断面形、やや角舟。8条1単位露し日右側り。露目は一部分後けるもの の衝。使用のため審しく摩耗。	14J15 Ⅱ	第31図4	
越後振錦	(430)	(188)		暗い青みの グレイムの 黄	青緑。脚部暗赤底。露面の段状。露目は一部分後けるもの の衝。使用のため審しく摩耗。	14K1 Ⅲ	第31図5	

表16 出土遺物観察表（鉄製品・鍛冶関連遺物）

種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特徴	出土地点	図版番号
刀子	24	5	212	54.3	基長62mm。	14J15奥土17	第32回1
刀子	29	4	(250)	61.4	基長63mm。	14J7Ⅲ	第32回2
刀子	26	4	(203)	43.6	木質の柄が残る。	14K14Ⅲ	第32回3
刀子	13	2	(174)	19.3	刃先・基尻欠損。	14J15Ⅲ	第32回4
小札	18	2	(52)	5.3	本小札。穴が二列。	14J1Ⅲ	第32回5
小札	37	2	59	17.5	本小札。穴が二列。2枚重。	14J15Ⅲ	第32回6
小札	62		76	44.6	本小札。穴が二列。6枚重。	14J1Ⅲ	第32回7
不明	(31)	2		2.7	六弁の花状。	14J16Ⅲ黒色土	第32回8
鑓	9	2	76	4.7	断面扁平。	14K20Ⅲ	第32回9
鑓	11	6	(57)	6.7	鍛身先端部欠損。	14K15Ⅲ	第32回10
不明	9	7	(128)	20.2	ヤス状鉄製品。断面角。	14J16Ⅲ	第32回11
鍛金具		3		6.2	外径38mm、内径25mm。	14J24堅穴97	第32回12
鍛金具	4			13.4	外径40mm、内径35mm。	14J17Ⅲ	第32回13
鉤	10	11	(104)	59.2	断面四角形。かえしが付く。L字型。	14K14Ⅲ	第32回14
鉤	10	10	(111)	41.7	U字型に近い。こしまげから先の断面丸。	14K14Ⅲ	第32回15
鍛	8	5	107	37.3	断面角。	14K15Ⅲ	第32回16
鍛	7	7	69	15.2	断面角。	14J17Ⅲ	第32回17
鍛	6	5	64	10.3	断面角。	14J16Ⅰ	第32回18
鍛	8	4	52	9.3	断面角。	14J16Ⅲ	第32回19
鍛	4	3	30	1.7	断面角。	14K20Ⅲ	第32回20
釘	6	5	72	7.2	折釘。	14J24堅穴97	第32回21
釘	5	5	(57)	5.2	折釘。	14J1堅穴98	第32回22
釘	4	4	60	2.1	折釘。	14J13Ⅲ	第32回23
釘	6	5	(58)	5.7	折釘。	14J7Ⅲ	第32回24
釘	4	4	56	3.0	折釘。	14J8Ⅲ	第32回25
不明	13	9	(208)	63.9	ヤス状鉄製品。	14K14Ⅲ	第32回26
鉄鍋	(72)	5	(106)	64.6	内耳。	14L15トレンチ	第32回27
鉄鍋	(70)	4	(85)	99.0	吊耳二孔。	14K20Ⅲ	第32回28
鉄瓶	(63)		(64)	144.2	注口部分。	14J22.3ⅠⅡ	第32回29
火打金	36	3	(94)	26.7	三角形状の腹部に4mm弱の粗歯穴が有る。	14K15黒土11	第32回30
火打金	29	3	(107)	31.2	三角形状の腹部に2mmの粗歯穴が有る。	14K7.3Ⅰ	第32回31
るつぼ				46.9	口径62mm、器高19mm。縁部のある銅帯が付着。	14K13黒18	第32回32
鉄滓	70	33	89	220.3	楕円形。	14J16Ⅲ 突口 周辺部	第32回33
鉄滓	66	43	90	212.8	楕円形。	14J16Ⅲ	第32回34
鉄滓	68	27	53	110.1	楕円形。	14J15Ⅲ	第32回35
羽口			(103)	573.7	石製。空気孔23mm。先端部は多孔性のガラス質溶解物付着。	14J16Ⅲ 突口 周辺部	第32回36

表17 出土遺物観察表（銅製品他）

種別器種	幅	厚さ	長さ	重量 g	特徴	出土地点	図版番号
斧	12	3	166	21.2	木瓜形の柄全体に松を刻む。中央の紋は松と竹。	14K20Ⅰ	第33図1
斧	12	4	197	23.8	魚々子地。中央に草花の透かし文様。	14J16Ⅲ	第33図2
斧	12	4	178	19.3	魚々子地。中央に二羽の兔。柄止め。	I	第33図3
斧	14	3	(115)	20.2	魚々子地。中央に四を有す一本の陰帶。	14K14Ⅲ	第33図4
小柄	15	7	(94)	21.1	鋼板を刀子の柄に密着して巻いた物。	14L4堅穴94	第33図5
小柄	13	5	(91)	17.1	鋼板を刀子の柄に密着して巻いた物。	14J15Ⅲ	第33図6
鑿	15	1	36	9.8	刃穴が無し。	14L4Ⅰ	第33図7
切羽	23	2	43	5.0	両面に細かい連弧文。端部がやや厚い。	14J15.1Ⅰ	第33図8
花瓶	2	(57)	50.3	50.3	胴部に三列の雷文帯。雷文帯上に二個の五弁花。	14J15Ⅲ	第33図9
不規			145	8.5	断面丸。太さ3mm。一片がL字状に折れる。	I	第33図10
鑿	15	9	80	3.3	鰐歯骨。下からの削り込みにより、小さな泥刺を作出。被熱。	14K15Ⅲ黒色土	第33図11
中柄又は刺突具	10	7	103	5.2	鰐歯骨。両先端が欠損。	14J24堅穴97	第33図12
中柄又は刺突具	7	6	88	3.8	鰐歯骨。両先端が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図13
中柄又は刺突具	6	6	92	3.3	鰐歯骨。両先端が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図14
中柄又は刺突具	5	6	60	2.4	鰐歯骨。先端部が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図15
駒		3		1.4	径17mm。	14J24堅穴97	第33図16
駒		3		1.4	径17mm。	14J24堅穴97	第33図17
駒		3		0.8	径(17)mm。欠損品。	14J14.1Ⅱ	第33図18
駒		3		0.6	径(16)mm。欠損品。	14J14.1Ⅱ	第33図19
玉	4		0.5	ガラス玉。無い青緑。外径9mm。内径4mm。	14J7Ⅲ	第33図20	
玉	4		0.4	ガラス玉。無い青緑。外径9mm。内径3mm。	14J14	第33図21	
磁石	99	57	180		磁面三面、自然石の側面に薄い抉り有り。	14J1土堅41	第34図1
磁石	42	10	(69)		磁面四面、側面に網目が残る。	14L3Ⅱ	第34図2
磁石	30	23	(66)		磁面三面、短冊形。	I	第34図3
磁石	75	66	(113)		磁面一面、整形有り。	14J1堅穴98	第35図4
磁石	76	49	(193)		磁面五面、使用頻度が高いためか各面とも被状。	13L24ⅠⅡ	第34図5
磁石	72	50	(108)		磁面六面、二面に長さ約5mmの刀痕(?)が多数有り。	14J19P56柱堅	第34図6
陶輪		70	105.7		最大径42mm。孔内径19mm。	14J9Ⅲ	第34図7
陶輪		49	81.6		最大径42mm。内径16mm。粘土の接合痕が顯著。底部下半に二本の縦目痕有り。	14L5Ⅲ	第34図8
陶輪		48	96.4		最大径44mm。孔内径33mm。底部とした部分に成形時のものと思われる擦痕有り。	14J16Ⅲ	第34図9
陶輪		50	81.7		最大径44mm。孔内径21mm。	14K3.8ⅠⅡ	第34図10
陶輪		43	98.8		最大径42mm。孔内径23mm。	I	第34図11
陶輪		41	35.9		最大径33mm。孔内径21mm。	14J6P23圓方	第34図12

表18 出土遺物集計表(陶磁器)

(総破片点数)

地 域	鉢					器										小 計	破 片	合 計	近世	總 計		
	中 青磁	白磁	染付	走船	荷輪	折角	小 計	瓶	灰陶	志野	施洋	施金	土器	越前	珠陶	信楽	窯戸					
鍋	123	25	256	31	3	415	146	76									1	223	638	638	84	722
瓶	99	439	265			1	826	508	8	8	2	22						548	1,376	1,376	38	1,414
杯		7	5	2			14											1		15	3	18
盤	2						2	2										2		4		4
香炉		2					2	1										1		3		3
鐵鋸							0						468	4				472		472	2	474
瓦当	1						1	7					160	5				172		172	19	192
袋物	5						5	1									1		6	20	26	
その他							2	2		2	1						3		5	6	11	
計	225	473	552	13	0	6,1369	664	87	9	2	22	1	628	4	5	1	1,423	2,014	2,014	2,562	172	2,864

表19 出土遺物集計表(金属製品他)

種 別	点数	重量(g)	種 別			点数	重量(g)	銘 名	国 名	初 跡年	点数
			銅	鉄	金						
銅 器	刀子	4	24.5	銅 器	柄	2	38.2	開元通寶	唐	621	17
	刺突具	91	654.1		笄	5	89.9	宋通元寶	北宋	960	2
	小札	1	20.3		鐃	1	5	淳化元寶	北宋	990	1
	小札	124	337.2		頭	5	42.3	至道元寶	北宋	995	1
	啖	4	19		金具	1	9.8	咸平元寶	北宋	998	1
	計	224	1055.1		鍍金	4	4.4	天聖元寶	北宋	1023	6
	ヤス	1	63.9		管	1	3.8	景祐元寶	北宋	1034	1
	鉤	4	131.2		黃	1	0.5	皇宋通寶	北宋	1038	8
	継金具	21	156.1		紙	1	0.4	治平元寶	北宋	1064	2
	引金	3	37.7		扇	2	49.9	熙寧元寶	北宋	1068	2
銅 製 品	計	29	388.9		計	23	244.2	元豐通寶	北宋	1078	7
	釘	256	757.7		紐	2	201.7	元祐通寶	北宋	1086	7
	絆	9	124.3		脚	1	11	元符通寶	北宋	1098	1
	鍼	1	5.2		花瓶	2	57.4	聖宋元寶	北宋	1101	3
	鑿	6	147.9		計	5	270.1	大觀通寶	北宋	1107	1
	計	272	1035.1		鏡	3	17.5	政和通寶	北宋	1111	2
	鍋	385	7562.3		計	3	17.5	淳熙元寶	南宋	1174	1
	鐵瓶	1	144.2		不明	31	61.3	洪武通寶	明	1368	16
	容器	1	2.5		合計	62	593.1	永樂通寶	明	1043	7
	火打金	1	31.2		石	茶白	2	無文			30
品 生活 具	火打	6	36		研	31		判金不能			127
	計	394	7776.2		合計	33		計			243
	不明	22	195.2		骨	中柄又は柄突具	39	寛永通寶			4
	計	941	10450.5		駒	5		合計			247
	羽口	21	319.4		不明	1		玉			
歴 治 開 通 連	スラッグ	157	8957.5		合計	45					
	不明溶解物	115	355.9		土	陶	15				
	鋼滴	1	3.3		製品	瓦	5				
	るつば	74			合計	20					
	合計	368	9636.1		玉	3					

### III 小括

#### 1 造構

##### 中央通路の発見

調査区南東部、現在の自然研究路付近で館の中央通路と思われる造構を検出したことは、今年度調査でも特筆すべきことであろう。過年度の調査で、第二・三平坦面で確認したものは側溝外縁を含め4.0~4.2m前後の道幅である。本年度第一平坦面で検出したものは、ほぼ同じ道幅であり、それの延長と考えられる。複数年度の図面合成によるため、誤差などの修正が必要であり、いま少し検討しなくてはいけないが、第一平坦面と第二・三平坦面の中央通路は一直線上にのるものではない。これは館中心部をのせる丘陵の地形が、第一平坦面では西北部分が谷地形になり、第二・三平坦面よりも幅が狭くなるので、第一平坦面の中軸線が第二・三平坦面より、北東方向になってしまふために起きた現象と考えられる。あるいは道路を直線で見通せないよう、意識的に軸線を変えていたとも当然考えられるので、この現象の要因は多角的に分析される必要がある。しかし、両者は館中央を貫き、館内を結ぶ意図をもって作られたことはほぼ間違いないであろう。

##### 大規模な盛土造成

空塹Bの北に接する平坦面（曲輪）の南半部地区は盛土造成によって作られていることを改めて確認した。一部しか基盤層まで掘り抜いていない状態であり不明な点もあるが、第二平坦面より傾斜する地形の斜面を切岸し、二重の空塹を掘上げた時の土を用いて造成したと考えられる。

又、この平坦面上は14K15・14J11区部分を除いて、地割を施していないのが特徴である。これは第二・三平坦面で多数確認した地割、屋敷地ではなかったことを示唆していると推測した。

##### 段や溝により画された地割

調査区北半部地区の中央通路に面する14J6区では、柱穴の大きさから検討すると第一平坦面にも中規模クラスの建物跡が想定できる。また建物跡の建て替え回数も第二平坦面同様5回前後は想定できそうである。北半部地区的地割は第二・三平坦面の地割と似た様相を持っていると考えられる。しかし、中央通路に面しない13L25区周辺地割、14K2区周辺地割は建物跡も想定できない状

態で、今ひとつ状況が掴めない。又、第一平坦面北半部地区は大手方向ではなく、沢に向かっても低くなる地形があり、中央通路に面する地割と面しない地割での高低差は第二・三平坦面と比べると非常に大きくなっている、かつ地割の長軸方向も一定しない様に思える。このような地形から見ると、第二・三平坦面とは異なる様相も持ち合せている可能性も高い。概報XIIでも推測したように、第二・三平坦面と類似する要素は、中央通路に面する地割のみにしか適応しないかも知れない。概報XIVでも推測したように、中央通路に面する地割が面しない地割を優越する現象として捉えることが可能かもしれない。今後の調査により具体像の解明が待たれる。

##### 錢埋納造構と想定される土壙48

勝山館跡では、これまでに約2,000枚程の銅銭が出土しているが、遺構内から纏まって出土したのは、これが初めてである。土壤内に箱が納められていたような痕跡を検出しているので、箱に納めて埋められたものと考えられる。所謂埋納銭と考へてよからう。しかし、埋納の意図は全くもって不明である。一部遺構が攪乱を受け銭が四散している可能性もあり、埋納時の原型を保っていないのが残念である。

#### 2 遺物

##### 出土陶磁器の年代

珠洲早期擂鉢をはじめとして、大窯I・II・III期、16世紀第4四半期以降に位置付けられる、唐津・野田皿、津州窯系のものと思われる染付皿など多種多様の陶磁器がある。年代的には勝山館築城当初から魔城期のものが一通り出土している。又、勝山館築城以前の年代に位置付けられ、伝世品と思われる青磁蓮弁文端反碗等が一部見られる。出土陶磁器の様相は第一平坦面が第二・三平坦面同様、勝山館築城期から魔城期まで機能していたことを示唆しているのだろう。当然、他地区からの流れ込みも考えられるが、しかし、塚を越えて遺物が大量に移動することは考え難く、基本的に第二・三平坦面から2次移動したものは少ないと考える。量的には塚内の第二・三平坦面同様、大窯I期（第1・2小期）段階相当のものが最も多い。年代的には武田信広の勝山館築城期から2

代目館主の光広（信広子息）時代に相当すると思われる。この時期の遺物集中は、光広が松前大館に移動する前の勝山館の収容人員数を反映していることも考えられているので、今後細かい分析が必要となってくるであろう。灰釉模花皿や大型の皿などあまり出土することが無い遺物も複数見られ、バリエーションも確実に豊になりつつあるので、瀬戸美濃製品に関しては更に注目して行きたい。

#### 印のある白磁皿

過年度の出土遺物を再調査したところ、過年度の調査でも印を記した白磁皿が2個体出土していることが判明した。一点は第三平坦面船神八幡宮跡に近い地点で出土した。底部のみしか残存しないので形状は不明であるが、糸底であることから端反皿が推測される。高台裏には呉須で草花が描かれている。印はX印に見えるが、片方の先端には直角に交じわる線があり、鎌の様な形状を呈している。今回出土のものに似ている様な感じを受けるが、失われた部分に継ぎがあるので、断定できない。もう一点は空堀Aから出土している。これも底部の一部のみしか残存しないが、端反皿と推測する。高台裏に呉須で銘のようなものが描かれている。印の形状は三角形の様に見えるが、失われた部分に続くので、不明である。また、他にも高台裏に印が書かれた瀬戸美濃鉄釉碗（大窯II期、概報IV P.16第10図25）がある。今後、資料を再検討するに当たってこのような資料が確認される可能性があるだろう。

現段階では白磁皿といううちに記すことが大きな特徴と思える。今の所、青磁や染付、瀬戸美濃灰釉碗・皿には見られない。上記の鉄釉碗の例はあるが、白磁が意図的に選ばれているのではないかろうか。

それでは、この印は一体どのような意味を持つのだろうか。先ず、印の形や底面に記す共通性から想起されるのが、擦文土器の底面にヘラがきの印が記されたものである。小平高砂遺跡、札前遺跡などの遺跡で多数見つかっている。他に印の形態から見て考えられる類例として、第27図に参考図を掲げた。1は松前城資料館所蔵（村岡ツヤ氏旧蔵）で、江戸後半の頃の落部（八雲）アイヌの門標といわれるものに記された印である。いわゆる「シロシ」を集成したものと思われる。2は岐

阜県に伝わるもので、袖の所有を表すために木に記す印を集成したものであり「木印（キジルシ）」といわれるものである（久末久義、渡部孝三・孝之氏御教示）。また民具によく見られる焼き印や墨書きした「家印（いえじるし）」にも似ている。いずれにしても所有を示す印であり、この白磁皿に記された印も所有印と推測される。

アイヌ民族博物館所蔵資料（虻田町亮昌寺旧蔵）には漆器碗の高台裏に印を付けたものがある（樋森進先生御教示による）。高台裏に記すという行為からは、それらとの共通項があり、そのことがアイヌ民族の印である可能性を示しているのではないか（長谷部一弘氏御教示による）という見方が出来そうである。しかし、高台裏に記す行為が、アイヌ民族特有のものと位置付けるにはまだ検討を要する点もある。石川県普正寺遺跡でも記号様の印は15世紀に位置付けられる切高台白磁皿に見られる。高台裏に記すという行為や、この様な記号は本州からやって来た和人社会にも当然あると考えられ、ただ印の形態からは、それがアイヌ民族のものか和人のものかはどちらとも言えない。

多種多様な遺物が大量に見られる出土地点の場のあり方を考えてみると、「送りの場」として想起されるかもしれない。しかし、「送り」遺構の概念が確立していない以上、そのような解釈は困難である。この場所は壇で遮蔽することによって大きな平坦面の中に小さな空間を区別して作り出していたことは間違いないが、遺構と遺物の関係が判然としない以上、これ以上遺構との関係の推測は差し控えたい。

アイヌ民族と和人が混在する地域にある勝山館の地理的位置、勝山館がアイヌ民族との日本海側の交易の拠点として位置付けされること、館内から大量に見つかった骨角器の存在を併せ考えると、白磁に記された印はアイヌ民族の「シロシ」と解釈することがよいと思われる。松崎が勝山館跡出土骨角器に見られる刻みを「シロシ」に近いものと位置付けたように、この白磁皿も器物に付けられた「シロシ」と位置付けたい。

今回出土した白磁皿は、勝山館跡出土陶磁器の一部がアイヌ民族に帰属していたことを示唆する重要な遺物と考えられる。しかし、上記の通り印を記す行為はアイヌ民族に限ったものではなく、他にも解釈の余地があることを明記しておきた

い。印のあるもの=「非和人社会的なもの」と位置付けたわけではなく、あくまでも一つの試案として提示したものである。今後、陶磁器ばかりではなく、器物全般に記された類例を涉獵した上で多くの方々と議論し、この遺物の持つ意味について再考したい。

#### かわらけ

勝山館跡ではあまり出土することが無く、中世の陶磁器に関する先行研究にも、非かわらけ地域と位置付けられる程である。出土物の殆どが、破片で点数は200点に満たない。平成四年度の調査で銅鑄造遺構から出土したものの（概報IV P.22 第11図3）と5個体ほどが形状を窺い知れる。てづくり整形であることから、いずれも京都系のものと推測される。今回出土のものは平成4年度出土品よりも小さく、形態は北陸地域で16世紀前半に位置付けられる京都系土師器皿と非常に似ている。あるいは、北陸地域で作られた京都系土師器皿がもたらされたのではなかろうか。また金属加工に關係すると想定される場と遺物のある付近から出土していることは、平成四年度出土時に銅鑄造遺構から出土したこととも共通する。金属關係の職人と「かわらけ」に、どのような關係があつたかは明らかに出来ないが、勝山館跡出土のかわらけの在り方を検討する上で、重要な視点になるであろう。

#### 鍛冶関連遺物

礫の羽口、坩堝片（銅用か）、スラッグが大量に出土している。第二平坦面の調査で出土した量に比べると格段に多い。遺構としては確認はされなかったが、この周辺部で鉄や銅の精製・加工などをしていた可能性が高い。昭和63年度の空塚Bに接する地区的調査では、礫の羽口や鉄滓などが出土しているが、今回出土した遺物もそれらと關係するのではなかろうか。第97号竪穴建物跡覆土から坩堝片が大量に出土したことは、第96号竪穴建物跡同様、竪穴建物廃絶後、鍛冶作業の発生じたものを処理する廐棄坑として利用されたのかもしれない。

#### 銅製仏具について

三具足の一つとして招来したものかと思われる花瓶が見つかっている。三具足は禪宗をはじめとする鎌倉新仏教の諸宗派などに見られる仏具である。今までには密教法具や念佛宗の鉢などを確認し

ていたので、それらの宗派の存在を推測していたが、今回の発見から、禪宗の存在も想定することが出来るのかもしれない。しかし、三具足は「君台觀左右帳記」に見られるように書院の床飾りとして用いられることもあり、即仏具することは出来ないのかもしれない。いずれにしても新出の銅製品という意味で、興味深いものと言えるであろう。

#### プローテーション作業で検出した微細遺物

鍛冶関連の遺物である鍛削片や不明溶物、被熱した粘土塊などを検出している。粘土塊は礫の羽口・坩堝片や、作業時に周辺の粘土（炉・張床？）が焼けたものと考えられる。あるいは、鉄型片であったのかもしれない。被熱した粘土塊は、平成6年度調査で検出した第59号竪穴建物跡でも多量に検出し、その一部は土壁が焼けたものと推測され、被熱した粘土塊には多様なケースが想定される。遺構の性格解明の為にも、今後特に注意すべき遺物かと思われる。他には炭化した米、小豆、山葡萄、胡桃などの種子、数種の不明炭化種子、獸骨・魚骨・貝類の細片なども多数見つかっている。

#### 3 今後の課題

今回の調査は、境外に位置する中心部の一端という地域の新たな一面を窺わせ、鍛冶関連遺物や印のある白磁皿、鐵埋納遺構の初検出など予想外に収穫の多い調査であった。いつものことながら、遺物と遺構の関係と発掘年代の検討が不十分であることは、調査員の意慢の結果であり、大変申し訳なく思っている。

今回の調査で特に感じるのは、遺物の化学的分析の必要性である。形態や、材質の肉眼観察が第一義的なされねばいけないのだが、遺物の持つ情報の最大限を引き出すためには化学的分析は避けて通れない。白磁皿の印の顔料（？）は早急に分析されねばならぬと感じる。又、鍛冶関連遺物も今回資料が増加した為、化学的分析が必要と思われる。幸い過年度までの調査では度々専門の先生に分析していただき、興味深い結果をいただいている。しかし、長い期間の調査で資料が膨大に蓄積されている上に、遺跡の地区毎に遺物にも異なる様相があると思われる。地区毎にそれらを分析することによって、地区毎の性格が更に浮かび上がってくることが充分考えられる。新出土の

種子、骨などにも地区毎の種の違いや、過去の調査において未検出の種があることも考えられ、更なる調査が必要であろう。

陶磁器に関しては、勝山館跡出土陶磁器片4万点余りの内1万2千点以上を占める瀬戸美濃製品の整理は重要である。大窯I・II期（小期区分では第1・2・3小期）に位置付けられる端反皿の分類が、遺構の年代決定を考える上で重要であり、

早急に再検討すべきである。同様に他の产地の製品も検討を必要とすることは言うまでもない。

未調査区には虎口推定地、中央通路の延長などがあり、又、地割の展開状況と建物跡の形態、鍛冶関連遺構の解明など数々の課題もある。今後の調査により、北半部地区の様相が明らかとなり、南半部地区との比較検討出来る日が待たれる。

## V 保存処理

### 1 鉄製品再処理

鍋、羽釜、火箸、火打金、釣り針、鎌、釘、鍼、小札、鎌、刀子など480点の処理を行った。錆除去後、エタノール脱水、バラロイドNAD-10のソルベントナフサ溶液による減圧樹脂含浸を行った。含浸処理後、接合等を行った。

保管はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入している。

又、処理済みのもので錆が発生し、劣化が始まつた鍋、弦、火箸、火打金、鎌、釘、鍼、小札、鎌、刀子など400点の再処理をあわせて行った。

劣化の原因は、樹脂の浸透が不充分だったことも考えられるが、保存管理に問題があったことも

考えられる。以前はシリカゲルと一緒に封入していたが、その取り替えが充分に行われなかつたことも原因の一つと考えられる。除湿の為のシリカゲルが湿度を多量に含んだ状態のまま封入されていたことが悪影響をもたらしたのであろう。

### 2 銅製品

煙管、小柄、毛抜き、和鏡、鏡など103点の処理を行った。エアーブラシ、メス等による錆除去後、エタノール脱水後、ベンゾトリアゾールのエタノール2~3%溶液による減圧樹脂含浸を行つた。含浸処理後、接合等を行つた。

保管はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入している。

## V まとめ

平成10年度の調査区は昭和63・平成元・2年度の調査区に隣接し一部重複する地区である。この3年間に亘る発掘調査によって、勝山館跡の第一平坦面と第二平坦面とは、大きな段差と二重の空塹で明確に区分されていることや段（空塹）の上である第二平坦面の端部には柵列が巡り、中央には橋が架けられ、橋なども想定された。空塹は屈曲して設けられ、所謂「横矢掛け」を呈することも判明した。又これらの構成は勝山館の形成された初期の段階、遅くとも16世紀初めを大きく下らない頃と想定した。これは一つには柵部分を通ずる第二平坦面上の中央通路に切られる竪穴建物跡の床面直上から越前櫛鉢が出土した元年度の調査であり、今一つには、第一平坦面の最奥部に掘り切られた二重の空塹のうち「空塹B」とした外側の塹を渡る橋の柱跡に付属するとした、陶磁器を一括埋納した祭祀土壇を検出した平成元年度の調査によるところであった。平成2年度の調査で大型の建物跡が見つかり、第二平坦面の重要性が推され、以降昨9年度までの調査で「客殿跡」その他各種の建物跡が中央通路を挟んで両側に繰り返し立ち並ぶ様相を示し得たところである。

こうして第二平坦面の様相が推された結果、昭和63年度の調査で空塹Bの外側の平地に想定された建物跡や平成元年度調査で同じく空塹の外側に想定された建物跡の規模と第二平坦面の建物跡との相違、更には63年度に出土した橋の羽口の存在等から、第一平坦面の果たした勝山館跡内での機能の解明が課題となった。

一方、第二平坦面に中央通路がしっかりと通っていることから、その先に位置する空塹を渡る橋が、二重の塹を一直線上に通るのか、平成元年度検出の空塹Bを渡る橋との関係を明らかにすることは、今後の勝山館跡整備にあたっての導線・ルートの決定の上でも解決しておかなければならないこととなった。こうした経緯から、文化庁や北海道教育厅文化課のご指導の下、本年度の調査が実施されたところである。

調査区南東に町道の自然研究路がある。この路から空塹Bに沿って40m、通路沿いに16m、寺ノ沢沿いに10m、前面北東部36m程の歪んだ台形状のおよそ530m<sup>2</sup>程の平場が「空塹Bの外側の平地」

である。この平場は前述のように空塹掘り上げ土等の土砂で北東から北西の範囲に広く盛り土、整形され作られている。この平地北部の盛り土が最も厚く1.2mを越える。しかもこの盛り土の平場の北東部は旧地形が沢状に入り込んで寺ノ沢に向かって傾斜しているが、更にこの傾斜部分を通路側から寺ノ沢方向に三段に削平している。この為、北部の平場とその下の削平面との段差が3m余りをなす切り岸が作られている。

これは自然研究路を挟んで本調査区には対応する南東半の昭和63年度調査区下の狭い小さな段の東部の現地形が大きな段差を見せていることから若干の食い違いを作りながらも左右を対応させ、この第一平坦面の中を更に二段に区分していたことを窺わせている。しかも既述のように調査北隅の削平部分14K 1区から珠洲城Ⅰ期のかなり使いこまれた櫛鉢が出土したことから、ほぼ勝山館跡の早い段階から、この形状は意図的に作られたことが推定されよう。

調査ではこの段差を補強・強調する意味でも前方及び寺ノ沢沿いで柵列跡を想定したが14L 13・18区の小柱穴列を検出したのみであった。なお14L 9・10区のP55~60、更にP11、12等の検出から、それらを繋ぐ壠の存在が想定される。

平場は大きく1~3号建物跡、96号竪穴建物跡等の検出された北西部と4~6号建物跡の検出された南東部に2分され使用されている。

北西半では平場の地形に長軸を平行する（空塹Bに沿う）3号建物跡とこれに長軸の直行する1、2号建物跡、そして竪穴96などが検出されている。3号と2号建物跡の新旧は不明であるが、2号建物跡より3号建物跡と1号建物跡が古い。2号建物跡と1号建物跡は間面、軸線がほぼ揃っており連続して建て替えが想定される。従って3号建物跡はこの2、1号建物跡に先行すると推されよう。又P70・90・87・84・146（更には68？）と連なる柱列は、竪穴96に伴う壠状の柱列とも見れるが、今まで竪穴にこうした柱列の伴った例がないことから、3号建物跡と軸線を同じくする建物跡の一部とも推される。尚3号建物跡を3×4間とし、その北西に1×3間の建物跡が併存すると推定しているが、尚3×6間の建物跡について

も留保しておきたい。尚2、1号建物跡の時期に、P47、48、50、51、66、69・68、38、31、28、26、25、22、45、44、42、41などの柱穴からなる小さな建物跡が併存したかと推される。或いはP64・62なども使用した1・2号建物と同様の建物跡も想定されるところであるが、これらについては、前述のように盛り土上の柱穴確認という困難さから、推測の域を出るものではない。

96号竪穴はその覆土中に瀬戸・美濃大窯Ⅰ期の碗などがあり、早い時期の廃絶が考えられる。遺憾ながら全ての遺物を観察出来ていないため、その年代はなお留保したい。又、本造構は焼失による廃絶の状態を示すと推するが、陶磁器等の遺物の二次的被熱の無いことなどから、その跡地への二次的廃棄も想定されている。焼失時の竪穴に伴うものとすれば、竪穴の幅員一括塗物として、有用であるが、又そのセット等更に考えなければならない。他方二次廃棄についてはその帰属などについて接合関係も含め、検討が必要である。

南東半には4～6号建物跡とその北東部の溝と段、堀で画された区画が検出されている。この区画は更に北西と南東に2分されそうである。

4号建物跡の長軸はこの平場の長軸に直行し、5・6号建物跡のそれは平行する。又、4号建物跡と北東の区画とは併存しないであろう。4号建物跡は、北西半の2・1号建物跡と同形態で軸線も揃い、5・6号建物跡は3号建物跡と軸線をほぼ同じくする。しかし乍ら4号と5・6号建物跡の新旧関係は2・1号と3号建物跡のそれとは逆の関係にある。新旧の認認の體おそれも無い訳ではないが、むしろこれらの建物跡が、この平場全体中で併存するものであったと想えておきたい。そうすると3号建物跡に対応して4号建物跡があり、2・1号に対応して5・6号建物跡があったと想定することができ、その5・6号建物跡に併せて北東の区画も作られていたと推し得よう。又4号建物跡の北東面の2つの柱穴の欠失もこの時として矛盾がないとできよう。なお建物の性格等については遺物等も含め、更に検討を加えることとしたい。

南東半北部の区画は、南東のピットとその周辺に集中する堀の羽口やスラッガが示す鍛冶作業空間と溝12・14等で画された区画に2分されるようである。双方に共通する不明溶解物がその区別を

曖昧な物にしているが、むしろそれを除くと前述のようにピットと鉄鋤、堀の羽口という抽出が可能と推されるところである。

溝で画された北東側は記号の付された白磁皿の一括出土や銅銭埋納の土壙等が見られるが、作業等に関連するものは少なく、廃棄ないしは祭祀の場と考えるべきであろうか。擂鉢や他の陶磁器の出土の把え方によっては廃棄場所ともできるが、捨場としては狭く浅い空間であり、それを目的として画されたことは難しい。松田の述べるようにそれぞれ別の上廃棄されたとすれば、この区画は意識的に特定の物を廃棄した場所であって、一般的なゴミ捨場としての区画とは異なることになる。それ故にこそ小区画の浅い段でも有効ということでもある。又こうした廃棄の場とした場合、その出自は5、6号建物跡に求めるのが自然であろう。しかしながら、銅銭埋納土壙と特殊な白磁皿、更には他の遺物等との間にどう一体性を持たせ得るかなど即断しかねるところがあり、今少し後考することとしたい。

この南東半の端部P379、203、245、244、251、252、253、254、263、270、254等の柱穴列がこの面を遮る扉等の柱列であろう。

この平場に隣接する自然研究路があるが、これと若干軸線を違えて、勝山館跡時代の通路が検出された。松田の述べるがごとく中央通路が第一平坦面をも貫いていることになろう。又その一部側壁に石積みが見られたのは新しい知見である。

この中央通路が空堀Bにとりつき、Aを渡る橋と一直線、又は一体となってBを渡るのか、平成元年度検出のBを渡る橋を介してAを渡るのかが今一つの課題であった。3号建物跡が存在している間はこのBを渡る橋は使用できないのでそれ以降となろう。従て少なくともそれ以前は、中央通路の延長上を渡ったことと推される。これに関連して、土壙一括の陶磁器のうち越前の小甕を年代決定の示準とし、16世紀初め頃まで或いは遡るかともしたが、越前の年代觀である16世紀第2四半期頃とすべきかも知れない。1529年瀬田内アイヌの攻撃前後頃である。

他に触れるべきところもあるが既に紙幅も尽きた。不充分なままに摘要することをお赦し願いたい。諸先学皆様の変わらぬご指導をお願い申し上げ、結びとしたい。(松崎)

# 報告書抄録

ふりがな	しせき かみのくにかつやまだてあと						
書名	史跡 上之国勝山館跡XX						
副書名	平成10年度発掘調査環境整備事業概報						
巻次	20						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	松崎水穂 松田輝哉						
編集機関	上ノ国町教育委員会						
所在地	〒049-0614 北海道檜山郡上ノ国町字大留100 01395-5-2230						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村名	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かつやまとてあと 勝山館跡	かみのくにちょうあざわつかよ 上ノ国町字勝山	013625	C-02-40 41° 48'	140° 6'	平成10年 5月11日 11月12日	800m <sup>2</sup>	環境整備 事業に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
勝山館跡	城館	中世	掘立柱建物跡6棟 竪穴建物跡5棟 通路跡	陶器 青磁・白磁・染付 赤絵 朝鮮 瀬戸美濃・志野・ 越前・珠洲 唐津 かわらけ 鉄製品 鍋・刀子・小札 銅製品 武具・仏具・鏡 骨角器	鉄鋤、坩堝、轍の羽口などの 鍛冶関連遺物が多量に出土した。  京都系土師器皿が出土した。  高台裏に印のある白磁皿が7個 体出土した。		

# 図 版



P.L. 1 調査区全景



1 調査区全景（北東から）



2 調査区全景（南西から）

14 J 16 銅羽口出土状況



3 第96号竪穴建物跡かわらけ出土状況



2 土壙48銅銖出土状況



4 烧土19灰釉皿出土状況



1 印のあら白磁皿



2 印のあら白磁皿



3 柏軒陶磁器



4 湖戸美濃灰陶器・三



1 漢瓦被燒瓦器



2 かわらけ



P. 4  
参道十庄

3 煙灰陶製瓦器



4 舞陽十日瓦器





1 調査区全景（北東から）

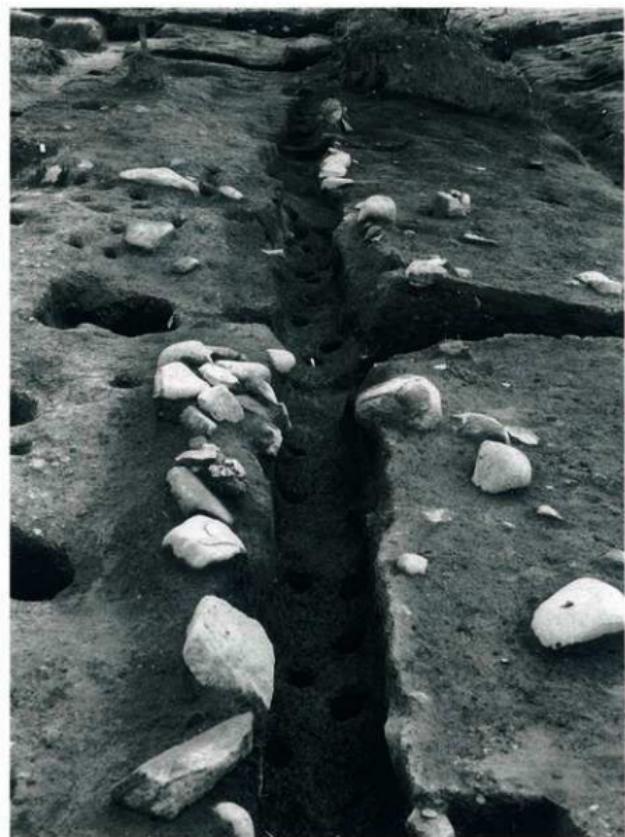


2 調査区全景（南西から）



1 中央通路検出状況（北東から）

P.L.  
6 遺構検出状況



2 中央通路南側溝検出状況（北東から）



1 中央通路検出状況（北から）



2 中央通路検出状況（西から）



3 中央通路南側溝堆積状況（北西から）



1 調査区北西部（北東から）



2 14L 5 区周辺地割炭化材出土状況（北東から）



3 14L 5 区周辺地割炭化材出土状況（北西から）



5 14L 5 区周辺地割（南東から）



4 14L 5 区周辺地割炭化材出土状況（北東から）



6 14K 1 区珠洲擂鉢・灰釉皿出土状況

1 調査区中央部（北東から）



2 14K2区周辺地割（北東から）



3 調査区南東部（北東から）



1 第74・75号堅穴建物跡（北東から）

3 第74号堅穴建物跡堆積状況（南東から）

5 第75号堅穴建物跡堆積状況（南東から）



2 第74号堅穴建物跡（南東から）

4 第75号堅穴建物跡（南東から）





1 第96号竪穴建物跡 炭化物層検出状況（南東から）



2 第96号竪穴建物跡 炭化材出土状況（北東から）



3 第96号竪穴建物跡（南東から）



4 第96号竪穴建物跡（北東から）



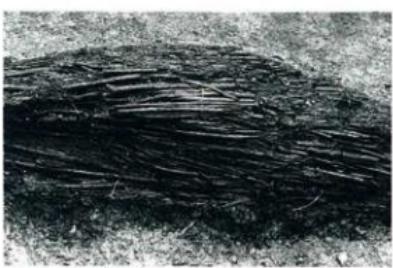
5 第96号竪穴建物跡 灰釉皿出土状況



7 第96号竪穴建物跡南側 炭化材出土状況（北西から）



6 第96号竪穴建物跡 灰釉碗出土状況



8 第96号竪穴建物跡  
炭化材出土状況  
(部分)



9 第96号竪穴建物跡  
かわらけ出土状況

P L. 12 遺構検出状況



1 第97号竪穴建物跡 埋堀出土状況（北西から）



2 第97号竪穴建物跡 埋堀出土状況（北東から）



3 第97号竪穴建物跡（南東から）



4 第97号竪穴建物跡（北東から）



5 第98号竪穴建物跡・土壤41（南東から）

6 第98号竪穴建物跡・土壤41（南西から）



7 土壌41（南西から）



8 土壌41堆積状況（南西から）

P.L. 13 遺構検出状況



1 土壌23堆積状況（北東から）



2 土壌（南東から）



3 土壌40堆積状況（北西から）



4 土壌40（北東から）



5 焼土2・3半裁状況（北東から）



7 土壌22堆積状況（南西から）



6 焼土2・3（北東から）



1 土壌46検出状況（南西から）



2 土壌46堆積状況



3 土壌46刀子出土状況



4 土壌46灰盤出土状況



5 花瓶出土状況



6 刀子出土状況



7 銅製品出土状況



8 满23 線口出土状況

9 满18 とりべ出土状況

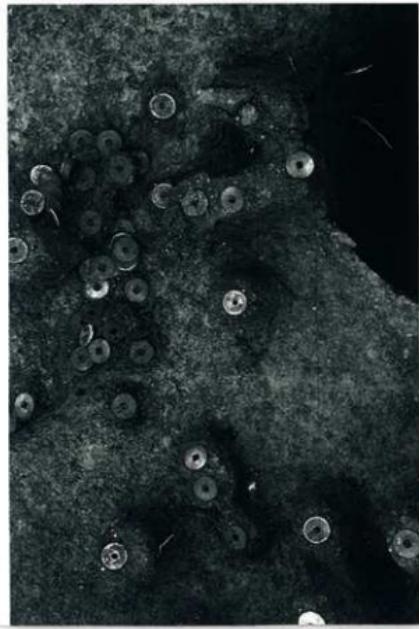
1 土壙 48 土層地盤状況（北東から）



2 土壙 48 鋼鐵出土状況（北東から）



3 土壙 48 鋼鐵出土状況（北西から）



4 土壙 48（北東から）



P.L.  
16  
遺構突出状況

1  
14 K 15区周辺地割（北東から）



2  
14 K 20区土層堆積状況



3 糸羽口出土状況



4 糸羽口下ビット



5 糸羽口下ビット堆積状況



6 糸羽口下ビット堆積状況

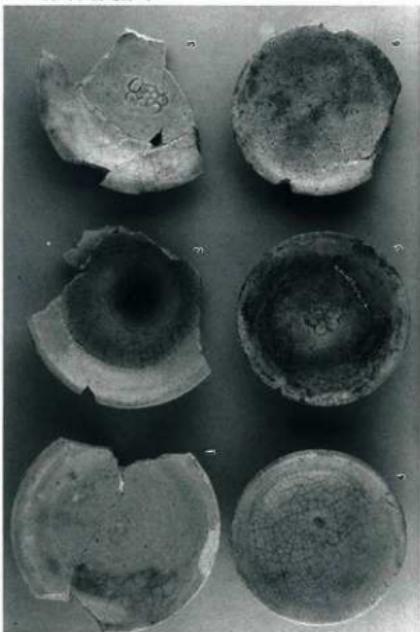




一 鹿沼・奈良町



2 滝江・新興区御器所



P.L. 18  
出土遺物

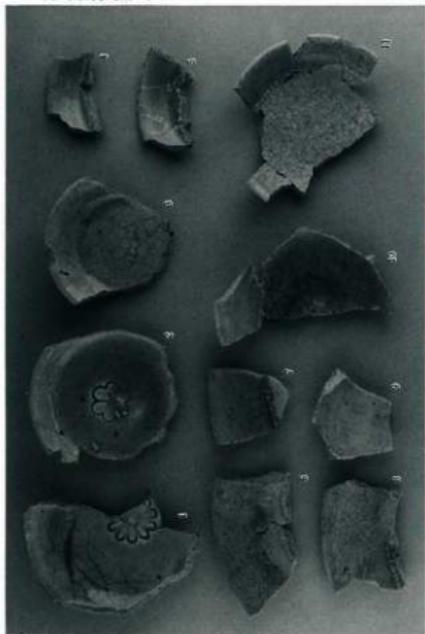
3 かわらけ



4 かわらけ



1 漢江流域区細目



2 織部品



3 織部品



4 織部品



1 磁器品・スラッシュ



2 掘出口



P.L. 20  
出土遺物

3 挖掘



4 掘出



---

史跡 上ノ国勝山館跡 XX

—平成10年度発掘調査環境整備事業概報—

発 行 上ノ国町教育委員会  
北海道桧山郡上ノ国町字大留100

印 刷 平成11年3月27日

発 行 平成11年3月31日

印刷所 富士プリント㈱

---



